

候義ニ付井伊掃部頭殿御家來日下部内記書簡寫

以書付得御意候然ハ今十七日彌御手始可相成之處別紙之通浪徒ヨリ願
出候趣一橋侯ニ出張之衆ヨリ被申越候由ニ付則寫取御廻申上候猶又敦
賀出張之御目付織田市藏殿ヨリモ同様賊徒降ヲ乞候ニ付御同人賊之陣
中へ踏込軍器等夫々御改可相成御手順ニ相成候段被仰渡候趣黒川嘉平
殿ヨリ被申開投右之通降ヲ乞候場ニ相成候得共賊徒策略之程モ難^{計脱カ}候間
油斷相成不申真ニ軍門ニ降伏致候義ニ候ハ、一先最寄諸侯力へ御預之
御所置方公邊へ御伺之上橋公ニハ御凱陣ト申様之手順ニ可相成歟併
右ハ嘉平殿限リ被申開候ニ御座候何レ可得貴意候得共右之段急札ヲ以
申上候

十二月十七日

日下部内記

京

御留主居中様

他所御用係中様

猶々本文之義御見開濟直ニ大津御役人衆へ御廻シ可被下候以上

別紙降伏狀前ニ記略ス

第七

同斷降伏仕候義ニ付某ヨリ書簡寫

昨日急使ヲ以申上候通彌昨十七日接戰ニ決シ諸手共其用意ニ而罷在候
處昨朝七ツ時頃ニ賊ヨリ加州陣へ使者相立何分兵糧竭候ニ付何モ窮迫
且ハ一橋公之御先鋒之御人數へ決而弓者引候存慮者更ニ無之候ト申來
候ニ付彼是懸合ニ相成候處就而ハ降伏致申候先干戈ハ不交候而事濟ニ
相成申候間昨日ヨリ毎度加州陣中彼是使者相遣候而取扱方問合候處先
昨夜葉原ニ新筑^{築カ}之關門ニ而賊之兵器ヲ加州へ受取賊兵六百人計加州陣
中へ預リ申候其餘ニモ雜兵共取合四五百人モ有之候趣右者越前陣中へ
御預リニモ可相成哉ニ加州人嘶ニ御座候降伏狀寫取送リ上度奉存候得

共右ハ一橋公宛ニ而差出候趣故松浦始開封ハ出來不申趣ニ付手ニ入次第御送り可申上候事濟ニ相成候得ハ一日モ早ク引上申度奉存候ニ付彼是懸合候處何レ引上方ハ一橋公ヨリ御指揮有之趣ニ御座候先日來今庄井新保二ヶ村ハ賊ヨリ十分亂妨致シ誠ニ目モ當ラレヌ有様ニ御座候賊中婦人三人計召連參居候趣ニ御座候騎馬ハ拾貳疋牽出候趣小荷駄馬九拾疋計有之趣ニ御座候右事件逐一御國ヘモ飛脚ヲ以奉言上候間此段御承知云々

十二月十八日

第八

同斷降參人加州勢ニ而引受候義ニ付某ヨリ之書簡寫

前略只今漸加州勢へ降參人昨夜ヨリ引受御人數出井降伏狀寫御廻申上候右文面ニ而ハ眞之降參ニモ不被存定而諸藩ヨリ後々議論有之義ト奉存候降賊八百人者矢張新保ニ殘シ有之兵器者加州預リ警固ハ加州越前

ヨリ先地へ出張之趣ニ御座候以上

十二月十八日

但人數書降伏狀別記ス

第九

浪士降參之義ニ付風說書寫

一浮浪之徒一件ニ付京都御警衛之諸侯方一橋公始諸藩ニ越出張之分浪士降參ニ付舊獵押詰職カヨリ過ル三日四日頃迄小具足陣羽織又ハ甲冑等ニ而毎日々々行軍ニ而歸京未彼地退陣不至向モ有之候事

一追々浪士共越前敦賀表大し寺ト申大寺へ滯留諸家へハ引取不申哉之由

一田沼殿先達而浮浪之徒之爲メ浪士之跡ヨリ被相登中仙道合渡宿へ御著御逗留密々尾州熱田へ御取移一橋公井會津公之様子探索被致又以通脱アルカへ御出此度浮浪之徒一字一橋公ヨリ御引渡相成江戸へ引連罷成候由風唱途中警固ハ加州之人數壹千之由唱此ヶ條色々浮說區々相聞得途中不安

心トモ相唱申候

第拾

降伏人數調并武器調等加賀中納言殿御家來指出候書付寫

一七拾七人 武田魁輔同勢宿所橋本屋

一六拾六人 川瀬專藏同勢宿所藤屋

一五拾四人 川上清太郎同勢宿所三郎右衛門

一八人 小監察有田八郎同勢宿所伴左衛門

一槍 貳拾筋

但銘々名札有之

一春負具足櫃 壹荷

但菅笠風呂敷等五品相添

一柳行李 貳ツ

但内品物入

一紙合羽壹枚

但此上三口共難波源之丞所持

右葉原驛へ引取人數高井武器等引受取締仕置申候新保宿へ相殘候分ハ

追而御達可申上候以上

十二月十七日

永原甚七郎

赤井傳左衛門

不破亮三郎

第十一

降伏之浪士姓名調

武田伊賀守

同 金四郎

同 左京

波山記事卷十一

七百七十三

同 彦右衛門

同 魁助

山國兵部

山岡淳一郎
小野賦賦力男
井田因幡
川瀬專藏
岸信藏
長谷川道之助
瀧口六三郎
小野藤五郎
狹松萬次郎
米島磯之進
柴屋元三郎
檜山三郎介
國分新太郎

竹中萬次郎
山形半六
朝倉彈正
瀧川平太郎
伊藤健藏
市尾孝之助
濱野松次郎
芹澤助右衛門
秋山又三郎
榎村平太郎
中村觀之助
岩間久太郎
濱野辰治郎

杉山彌一郎
佐々木重兵衛
朝倉三四郎
高橋市兵衛
安藤繁之助
小泉寅次郎
都賀平之助
關内熊五郎
武田耕雲齋附屬
高瀬秀之助
安藤彦之進
石井政之助
神山勇

津田新之助
前木光之助
小野鹿之允
下野嚴三郎
横田孫四郎
同萩力芳三郎
萩谷金次郎
川邊信藏
木村權六
渡邊雄之助
西村大三郎
大畑外記

國造清之允
小林忠雄
川上清太郎
原内藏之助
前木貞太郎
森誠之助
莊司友十郎
鈴木秀五郎
平野金三郎
島田又左衛門
高野長五郎
大内雄之助
櫻井辰之助

關井三郎
加藤隆之允
小栗彌平
加藤惣助
野口主馬
川崎德之進
伊藤榮太郎
唐津信藏
難波源之丞
深谷四郎
中島貞藏
高橋元次郎
大竹松治郎

沼田亮藏
高松與四郎
小坂莊右衛門
房前善藏
田中重藏
長谷川新吉
關友七
石川信八
岡野寅治郎
川崎彦助
粟飯原三藏
栗山源藏
川澄清右衛門

篠原造酒藏
内藤昇一郎
照沼久米治郎
松崎熊之助
山口四郎左衛門
山田孝助
向力旬日彦七
大久保新三郎
岩戸常藏
笹目平三郎
西木本多助
若村友右衛門
上野六右衛門

幡谷善七
笹野福治郎
田中六之助
堤三次郎
中板平助
石崎彦助
磯部春之助
川澄鬼平
田村市左衛門
本多作三郎
今野帶刀
加藤積治郎
藤田米太郎

七百七十八
小松崎庄之助
登戸佐兵衛
竹中惣吉
山田國次郎
松本源助
小崎重次郎
坂本勝助
小田部二里平重方
菊地忠兵衛
渡邊久助
平山藤之助
三嶋善七
大本太助

高橋一郎
松本富藏
野口重吉
立花文次郎
中村清之丞
木山藤五郎
塚田與市
高田金治郎
杉貞次郎
本富貳太郎
野村徳兵衛
蓮沼利助
佐々木久助

七百七十九
小林勇太郎
溝口多兵衛
石川丑五郎
黒澤雄二郎
三木源助
瀧口浪之進
宮本傳二郎
井坂藤十郎
武田春吉
横田貞藏
三田徳平
中山兼五郎
服部由兵衛

田崎桂藏
青柳富吉
熊坂彦三郎
小林貞七
關登一郎
赤館織之助
鶴田善兵衛
小松主殿
高橋勝三郎
米川忠七
大津雄太郎
富泉永力鏡造
森庄三郎

清水八次郎
鳴志力著田半七
宇佐美孫兵衛
石川鏡藏
成井藤九郎
吉川伊之助
小泉平三郎
小侯隼之助
山中嘉七
長尾寅吉
增田喜平次
武藤龜吉
小川忠吉

堤善兵衛
大米平之助
小侯啓次郎
岡野彦四郎
安清四郎
高崎四郎
相伊助
長瀬謙治
鈴木庄次郎
木村水之助
小林由左衛門
鶴田彌平治
小松彌太郎

沼田八郎
平山良之助
加藤太郎
檜村定吉
檜村忠兵衛
酒井八三郎
山口庄助
平野岩吉
片岡源次郎
石川忠右衛門
坂藏之助
中川新助
上田瀧之助

清水源三
鈴木清吉
木村彦四郎
小松崎信次郎
岩松相之助
中村藤一郎
長谷川定吉
吉本次郎吉
關口善吉
藤田啓介
武田大助
小川新三郎
山本左一郎

天岡久治
細谷久介
矢口金右衛門
關源兵衛
福井利兵衛
小野寺信次郎
塚原萬次郎
鈴木信藏
加筒信太郎
大和田熊吉
遠田千吉
西名惣七
大和田秀吉

長谷川郁三郎
小笠原新之助
坂本小一郎
二州^{川カ}芳之助
大州大助
井坂彌兵衛
近藤半藏
畠藤吉
鬼澤茂兵衛
關口伊助
乾源藏
荒井主計
齋藤安之允

飯沼新兵衛
小泉又助
青木代五郎
鶴田^{乙カ}乞次郎
金澤勇助
寛忠三郎
堀首助
前野彦藏
野口松次郎
關口寅吉
鳥山七藏
岡田主水
關彦次郎

鈴木源吾
市尾源七
中村惣兵衛
中山重藏
小川三郎
楠要人
孫川誠一郎
關口直次郎
潮田啓三郎
菅谷安兵衛
鹿島義兵衛
前崎武次郎
幽内彦三郎

小澤新三郎
笹見彦八
齋藤又左衛門
藤田中務
飯泉芳之助
山田一郎
芝田清兵衛
福田地平次
山口義八郎
奥村清吉
坪山源助
金輪清兵衛
藤岡利兵衛

米川小次郎
石神三次郎
宮崎安五郎
田村松之助
加藤庄七
鴨下勇治
伊能源次郎
荒木政助
堀江藤之助
高崎新平
吉川文造
高田助左衛門
今泉才治

宮内仁藏
山本三五郎
石田秀之丞
石島彦七
鬼澤熊次郎
高松喜助
佐野吉一郎
藤岡多助
畑山政之助
前島源三郎
篠原伊助
富川寅次郎
佐々木庄造

杉 藤 七
村 善之助
飯田 貞助
石川 相之助
細谷 源七郎
中 根 新作
吉 岡 鑑次
小 林 富助
池田 平太郎
須 木 藤吉
村田 菊之助
小 英 藤之助
菊平與惣右衛門

塚元 傳次郎
關 上 五郎
飯田 與三郎
籠 善兵衛
大久保市太郎
新橋 鑑太郎
內 藤 利兵衛
神田 左右介
山 口 新作
中村 源太郎
小 島 峯之助
久 保 田 久吉
茂 木 淺吉

箕 輪 啓吉
出 沼 榮吉
小 島 彦次郎
箕 輪 庄三
栗 又 新兵衛
石 川 春吉
森山 藤左衛門
秋 野 源兵衛
小 牧 平十郎
高 橋 甚兵衛
宮 田 沼三
佐 藤 與三郎
片 岡 啓七

小野 義右衛門
小 岸 龜吾
出 沼 藤一郎
高 橋 庄三郎
宮 本 駒次郎
大 久 保 藤造
高 田 左太郎
青 木 源介
高 木 直右衛門
山 中 清吉
高 井 伊兵衛
荒 井 武次郎
前 島 德之助

本間信三郎
片岡武兵衛
箕輪又次郎
萩利兵衛
箕輪國次郎
前島七藏
鷺川寅松
飛原造酒之介
坪小太郎
前田秀五郎
楠常次郎
高田要介
木内國三郎

茂木直兵衛
小島新内
内野啓兵衛
明間半兵衛
前島雄三郎
辻利吉
垣良介
飯倉常三郎
金澤惣藏
柳下惣助
二方舍人
木内富五郎
寺門周吉

粟飯原正次郎
加藤木雄助
加藤榮次郎
山ノ關長藏
堤清人
關根惣一郎
大揃新介
中庭中三
小沼榮助
萩野大藏
刑熊太郎
川島森之助
伊藤久七

齋藤三代松
吉野勇
黒澤健藏
小澤彌一郎
深隆吉
木村蘭三郎
那部才次郎
山澤惣介
大竹勇助
一山太助
羽黒久米之助
代田内藏之助
飯島喜助

萩原富之助
飯島與助
上子竹次郎
佐々木庄藏
中村文吉郎
安藤庄五郎
宮本孫四郎
梶山啓助
安掛藤十
立原浦次郎
飯田民藏
川津巳之助
宮本安次郎

渡邊金次郎
山口平次郎
山口熊次郎
八幡繁松
栗飯原久七
梅川民四郎
青木源之允
吉川忠藏
片波見善一郎
宇津木巳之助
飯田丑松
栗飯原留吉
山口庄助

森川長吉
房崎長次郎
吉川半兵衛
守川善次郎
長山良平
原勇
舟木吉之助
兩林常藏
内田半三郎
吉田藤藏
米川文藏
關川三平
深谷勇五郎

櫻井惣兵衛
梶井松次郎
淺井一壽
望月淺太郎
石川治郎
多賀野左之助
川島安之助
内田藤吉
村上米五郎
青山清三郎
大嶋新藏
高島惣右衛門
三田由藏

小谷庄三郎
大關彌兵衛
藤澤吉兵衛
小林清藏
笹目茂右衛門
鈴木吉藏
齋藤伊三郎
俵谷彦太郎
宮本清藏
吉田清介
茂木久助
關東竹次郎
宮本茂助

深見鏡五郎
是門半助
山下鶴吉
坂冬藏
細川見代五郎
加藤清介
小岸半十郎
關根角兵衛
福田爲之助
中河原與助
木村安五郎
石川惣助
多田孝藏

中島芳右衛門
前野半七
山本茂助
岡部彌兵衛
森崎直助
中村向四郎
小澤五郎
小林清助
遠藤元吉
大山清太郎
長谷川謙吉
本橋一
關澤友五郎

內堀貞助
齋藤吉次郎
千葉常四郎
元木孝之助
中村安次郎
市川兼次郎
黑田孝吉
村田情助
青山千太郎
大久保半七
服部庄助
小橋新作
田口伊左衛門

杉本藤兵衛
 高野友右衛門
 大久保久兵衛
 齋藤萬次郎
 魁淵惣吉
 武口道之助
 木村龜次郎
 武田耕雲齋家來

龜山大助
 富士平七郎
 島田勝三郎
 加藤惣助
 白木衆三
 白須伊惣太
 小山田勇之助
 關勇之助
 横山富右衛門
 樫村定之助
 古郷丑太郎
 梅原辨藏

鈴木庄三郎
 渡邊監之助
 多田梅次郎
 木村七郎
 武田彦右衛門家來
 小川元三郎
 山崎庄八郎
 別當 惣吉
 武田魁助家來
 伊藤官十郎
 岸川清之助
 渡源太左衛門
 野崎佐吉

岡田七郎
 市尾萩右衛門
 森兵五郎
 安藤鏡次郎
 莊司寅吉
 岡崎兼夫
 竹島右之進
 岸田扇之助
 別當 寅吉

田丸左京附

新四郎

別當 竹松

善七

中間 久七

伊助

山國兵部家來

神山芳三郎

小野賦男家來

小澤辰之助

原辨之助

高谷德三郎

谷島友吉

篠田利助

佐川捨五郎

淺野善兵衛

孫川武四郎

舟橋甚之允

石神元兵衛

細谷德介

立花新吉

鈴木大八郎

石川伊三郎

別當 政次郎

久助

竹中萬次郎家來

飯田善兵衛

伊野彦次郎

山崎貞助

山形半六家來

野口清吉

藤川榮藏

鷹井三藏

川澄鶴次郎

木松扇松

井口藤次郎

張智長兵衛

佐々木愛之助

別當 吉兵衛

井田因幡家來

栗又鉄之助	柳下鉄三郎
後藤五郎吉	後藤利助
後藤兼吉	後藤善吉
後藤民藏	後藤惣吉
朝倉彈正家來	
山口正助	根本熊吉
根本豊吉	根本佐助
瀧川平太郎家來	
福田榮之助	片岡藤吉
吉田確助	大越小平
小野松千代松	別當 金藏
周助	
岸信藏家來	

村田小一郎	千葉鎌次郎
山本義八	和具佐十郎
黒澤清五郎	石崎卯之助
別當 左門	
伊藤健藏家來	
田長爲五郎	和田忠五郎
三田鉄藏	別當 喜助
長谷川道之助家來	
平助	
市尾孝之助家來	
國山大藏	松原彦兵衛
別當 又五郎	
瀧口六三郎家來	

中山半七

中山米吉

○圈者前書ニ無之分

○村島末次郎家來

熊五郎

○米橋清之進家來

平藏

丈助

○桂村國太郎家來

平助

○桑名元三郎家來

平兵衛

中村觀之助家來

中山金治

別當

清藏

安藏

平助

市藏

鈴木多吉

檜山三郎介家來

大塚龜四郎

田邊梅次郎

岩間久次郎家來

別當 某

國分新太郎家來

友吉

濱野松次郎家來

中坪途助

小澤勇之助

杉山彌一郎家來

西田政之進

星彦七

藤田平五郎

稿カ邊忠兵衛

新倉鏡之助

前木光之助家來

藤右衛門

與右衛門

安藤繁之輔家來

三林重太郎

佐々木鏡之助

渡邊庄吉

横田孫四郎家來

利助

川邊信藏家來

勾山彌平

別當清七

田村市左衛門家來

藤吉

五來藤八郎

荒木仙太郎

大久保金太郎

小森幾三郎

細川新五郎

小倉駒吉

○渡邊矩之助家來

吉兵衛

川上勇家來

鹽嶋武右衛門

別當忠四郎

川上清太郎家來

飯塚直次郎

廣間右門

山田吉兵衛

永井小四郎

川野藤四郎

福田辨助

酒崎忠三郎

吉川久治

矢須徳藏

藤島伊助

玉造清之允家來

才助

原内藏之助家來

藤堂平助

清水久米三郎

山崎定助

別當 德五郎

加藤惣助家來

山崎吉助

野口主馬家來

唯野伊八

庄司友十郎家來

忠兵衛

伊藤源治

初橋萬之助

朝田祐助

惣五郎

別當 彌平

森誠之助家來

信尾定助

鈴木秀五郎家來

藤次郎

唐津清藏家來

松次郎

平野金三郎家來

清吉

喜藏

○筑井三郎家來

佐柄木太郎

今井平助

高野長五郎家來

高野兼吉

彌平

源八

橋本兼吉

本多兵太郎

皆川龜松

星崎小三郎

萩沼重吉

別當松五郎

中崎貞藏家來

石田岩吉

上田藤次郎

鳴(別當)著田喜平

大内雄之助家來

別當茂右衛門

松孫兵衛

金八

市兵衛

豐田市之助

篠原造酒藏家來

高橋元次郎家來

○高橋貞四郎家來

久五郎

横田平太郎

内藤昇一郎家來

五三民之助

安藤丈助

照沼久米次郎家來

中方大之進

松崎熊之助家來

飯田瀧治

渡邊金四郎

谷村與左衛門家來

小林信之助

早川政古

別當周治

黑澤雄二郎家來

塚田松太郎

黑澤八十郎

大和田秀吉家來

菅沼九郎

小林扇吉

前島德之助家來

常兵衛

傳七

留吉

七之助

友吉

第十二

降伏之浪士共田沼立蕃頭殿へ御引渡之義ニ付一橋様ヨリ關白殿下へ
被指出候御書付寫

春寒之砌先以御安清被爲渡奉恐察候然者舊獵降伏之賊徒共爲受取田沼
立蕃頭昨日京著仕候ニ付即同人へ引渡申候此上之所置ハ關東之見込次
第同人方ニ而取計候事ニ御座候此段御心得迄ニ奉申上候誠恐謹言

正月十九日

慶喜

殿下

諸太夫中

第十三

武田伊賀等斬首被 仰付候罪狀書寫

元水戸殿書院番頭

彦右衛門父隠居

武田伊賀

武田彦右衛門

伊賀次男

武田魁介

一其方義元同藩市川三右衛門ヨリ申立ル趣主家ヲイテ採用相成候而ハ故
同藩結城寅治之存意貫キ家政取亂ル、様可相成ト存愁訴致段者主家之
爲筋ト存込仕成心得ニ候トモ慎中之身分下總國小金驛へ出張追々同志
之者共多人數集屯又ハ鎮靜トシテ出張致シ候松平大炊ヲ欺隨從致城内
へ可立入ト仕出シ其上常州那珂湊其外所々暴行御討手井主家へ敵對剩

主家縁邊へ相便リ可申旨軍裝ヲ以所々横行國々動亂爲致農民ヲ惱段御
 大法ヲ犯シ不容易所業ニヲヨフ始末不恐
 公義仕方重々不埒至極ニ付嚴科ニモ可被所處追々右之次第恐入候義ト
 心付加州勢へ降參伏致候ニ付格別之御宥免ヲ以斬首申付者也
 一 脱走之脱士共義ハ越前敦賀表濱手ニヲイテ追々不殘斬首相成候趣未田
 沼候歸府無之候

一 敦賀賊徒正月廿八日引渡當月四日ヨリ於最寄松原誅戮之事

第十四

井伊掃部頭殿御家來ヨリ浪士斬首之義ニ付指出候届書寫
 先日御届申上候敦賀表囚人之賊徒去ル朔日ヨリ呼出有之然處死刑之者
 有之候間斬人差出候様黒川近江守様瀧澤喜太郎様ヨリ同三日御達有之
 翌四日掃部頭ヨリ斬人拾貳人差出賊徒之内別紙之通斬首仕候段出張家
 來之者ヨリ申越候此段御届申上候様掃部頭申付越候以上

二月十四日

井伊掃部頭内

別紙

山本運平

掃部頭ヨリ差出候斬人斬首仕候賊徒

- | | |
|--------|----------------------------|
| 武田伊賀守 | 同魁介 |
| 山岡淳一郎 | 村部萬次郎 |
| 朝倉彈正 | 高野長太郎 |
| 米橋清之丞 | <small>稻之右衛門事</small> 田丸左京 |
| 伊藤健藏 | 岸新藏 |
| 川上清郎 | 瀧川平七郎 |
| 武田彦右衛門 | 山國兵部 |
| 長谷川左之助 | 井田因幡 |

右之餘左之賊徒ハ酒井若狹守殿手ヨリ差出斬首仕候趣ニ御座候

川瀬專藏

國分新太郎

前橋德之助

藤田小四郎事 賦男

藤田小四郎事 山形半六

小栗彌市

竹中萬次郎

内藤昇一郎

右之通御座候

二月

第十五

阿部駿河守殿御家來ヨリ浪士斬首等之義ニ付指出候届書寫
駿河守家來へ御預降人之内切腹死刑之者有之間介錯人并斬人差出候様
井戸大内藏様小出助四郎様ヨリ去ル三日御達有之介錯人貳人斬人差出
候處別紙之通切腹斬首仕候段在所表ヨリ申越候此段御届申上候以上

阿部駿河守家來

四月七日

石田鏡右衛門

新井ヨリ以下
森山兼太郎迄
前年十月那珂
湊ナニテ降参
族ナリ

別紙

切腹

新井源八郎

同

村田理助

斬首

木村三穂之カ助

同

黒澤覺助

右之通御座候以上

四月七日

阿部駿河守家來

石田鏡右衛門

第十六

降伏人森山兼太郎義加納大和守殿御家來へ御預替ニ付被 仰渡候御
書付寫

加納大和守へ

松平彈正忠家來へ

御預人之内

森山兼太郎

右之者其方家來へ御預替被 仰付候間受取之者彈正忠在所へ早々差遣
引取候様可被致候尤最寄之御預人同様可被心得候

第十七

松平彈正忠殿 御進發御供ニ付野州降人御預御免被成下候ニ付被

仰渡候御書付寫

先達而其方家來へ野州降人共御預被 仰付置候處其方義此度 御進發
御供被 仰付候間右御預人松平大和守始外拾六家家來へ御預替被 仰
付候間得其意右家來共爲受取相越候ハ、別紙之通相心得引渡遣候様可
被致候

松平彈正忠家來へ御預人

松平大和守家來へ御預替

史館勤

横須賀兼次郎

廟所勤

小泉五藤治

臺所勤

篠本金藏

勘定所勤

中村住藏

勘定所勤

土井大炊頭家來へ御預替

郡方勤

中村孝之助

右館助、本文之儘相記置候

館 延壽補 孝之助

同

黒田伊勢守家來へ御預替

同

蓮田勘之助

同

大岡兵庫頭家來へ御預替

同

中村猪之助

同

森川内膳正家來へ御預替

加藤徳太郎

同

水野肥前守家來へ御預替

關信一郎

同

林肥後守家來へ御預替

富山金吾

同

酒井鍵次郎家來へ御預替

桑名清四郎

同

板倉内膳正家來へ御預替

永井清助

同

保科彈正忠家來へ御預替

海野平太郎

同

稻葉備後守家來へ御預替

寺社方勤

虎口政藏

同

米津伊勢守家來へ御預替

小島行藏

郡方勤

井上筑後守家來へ御預替

佐藤彦之助

矢倉方勤

加納大和守家來へ御預替

森山兼太郎

藏方勤

阿部駿河守家來へ御預替

菊地祐次郎

第十八

加納大和守殿野州降人松平彈正忠殿ヨリ受取候義ニ村御届書付寫

水戸殿矢倉方勤

森山兼太郎

右之者私家來へ御預替被 仰付候旨去ル五日御書付ヲ以被仰付候ニ付爲受取家來松平彈正忠在所上總國大田喜^{多カ}へ昨十四日差遣候處同人家來ヨリ受取私在所同國一宮へ著仕最前之御預人同様嚴重ニ番人申付置候此段御届申上候以上

問五月十五日

加納大和守

第十九

野州降人引渡方之義ニ付土屋豐前守殿へ被仰渡候御書付寫

土屋豐前守

野州降人之内郷士三拾三人出家社人修驗五拾貳人百姓三百四拾貳人都合四百廿七人人足寄場へ可差遣候間得其意當地へ呼寄候義等取計寄場御目付并寄場奉行へ引渡候様可被談候尤黒川近江守并御目付へ可被談候

第二十

同斷黒川近江守殿へ被 仰渡候御書付寫

黒川近江守

同文言

右之通土屋豐前守へ相達候間得其意同人ヨリ受取人差越次第可引渡旨御預罷在候諸家へ可被達候尤郷士始名前之義ハ豐前守へ可承合候右之通相達候間得其意差支無之様可被取計候

第二十一

戸田越前守殿御家來之内浪士へ關係致候義ニ付御高之内被 召上隠居被 仰付候御書付寫

戸田越前守

名代 近藤力之助

野州邊賊徒暴行候ニ付爲討手 公義御人數被差向諸家へ追討被 仰付候節其方へモ同様被 仰付候處右賊徒其方家來之内從來關係致シ候

者共_ニ有之其上家來共出張方彼是不都合_ニ相聞得且心得方_ニ致等閑候趣畢竟家督以來家政向不行届故逸々右様之次第_ニ至候段不束之至被思召候依之急度_ニ可被 仰付之處御宥免_ヲ以領地之内貳萬七千八百五拾石被召上隠居被 仰付急度慎可罷在候

第二十二

御小性_{督脱方}戸田土佐守殿越前守殿家御相續被仰付候義_ニ付被仰渡候御書付寫

御小性

戸田土佐守

名代

近藤力之助

同文言之内急度慎被 仰付候其方義先達假相續_ニ相願候義_ニ而越前守家相續被 仰付爲家督五万石被下鷹ノ間詰被 仰付依之御小性御免被成候追而所替可被 仰付候

正月十五日

第二十三

戸田土佐守殿所替被 仰付候御書付寫

戸田土佐守

名代

戸田肥後守

奥州棚倉へ所替被 仰付候

三月八日

右於芙蓉間美濃守殿申渡雅樂頭殿御老中御列坐

第二十四

賊徒共爲出討御出張早速鎮靜仕候義_ニ付

松平出雲守

賊徒共爲追討一橋殿へ付添出張仕候處早速鎮靜相成候段 御満足被思食候段從

御所被 仰出 御賞詞之段一橋殿ヨリ被仰渡

正月

第二十五

同斷戸田采女正殿等へ被 仰出候御書付寫

戸田采女正

大久保加賀守

賊徒共爲追討人數差出候處鎮靜ニ付 御賞詞之段一橋中納言殿ヨリ御達之事

正月

第二十六

賊徒京都迫近之節出張盡力之義ニ付松平民部大輔殿へ 御賞詞被仰出候御書付寫

松平民部大輔

常野脱走之者共京都迫近ニ付出張盡力之段神妙ニ被 思食且家老以下

へモ從 御所被仰出候段一橋殿ヨリ御書付被相渡候事

正月

第二十七

松平周防守殿野州出張之節格別被相働候ニ付所替被 仰出候御書付寫

御座間

御奏者番

寺社奉行兼役

松平周防守

昨年家來共野州へ出張之節格別相働候義モ有之候間下野宇都宮へ所替

右於 御前御直々被 仰舍之

三月八日

第二十八

同斷猶又御精勤被成候様御沙汰被爲在候御書付寫

松平周防守

先代周防守義諸勤向等厚相心得候ニ付而ハ家來共ニモ格別勉勵相勤其上常州浮浪追討之義モ骨折平生心掛宜敷旨被 思召ニ付其旨相心得精勤仕候様 御沙汰ニ候

右於芙蓉間美濃守殿申渡雅樂頭殿御老中御列坐

第二十九

鳥居丹波守殿賊御追討被 仰付拔群之御働ニ付御刀并御時服御拜領被 仰付候御書付寫

鳥居丹波守

常野兩州賊徒追討之義被 仰出候處家來共指揮行届格別骨折拔群之働等有之段達

御聽一段之事ニ被 思召候依之御刀并御時服貳拾拜領被 仰付之

五月七日

第三十

同斷御家來へ銀子并御時服拜領被 仰付候御書付寫

鳥居丹波守家來

家老

高須大助

用人

松山十兵衛

軍事係リ

松本五郎兵衛

物頭

高須賀司馬

小笠原甚三郎

銀五十枚
時服三ツ

銀卅枚
時服三ツ

銀廿枚
時服三ツ

常野兩州賊徒追討之義格別骨折候ニ付銀子等被下之

鳥居丹波守家來

銀三百枚

同貳百五拾枚

常野兩州賊徒追討之義格別骨折候ニ付書面之通銀子上下之勳功之優劣ニ應シ爲取候様可被致候

目付	旗奉行	中筒奉行	大筒奉行	使番	五拾六人	持筒之者并	足輕	百三拾四人
----	-----	------	------	----	------	-------	----	-------

鳥居丹波守へ
同人家來

戰死之者

軍事奉行

淵本平

中筒奉行

仁木官藏

同士分

三人

手負之者

物頭

高須賀司馬

同士分足輕

銀五拾枚
金拾兩

銀廿枚
金五兩

常野兩州賊徒追討之節戰死并手負之者共ニ爲御手當書面之通被下候間
戰死之分ハ其身寄之者ハ爲取候様可被致候

五月十四日

第三十一

脱走之浪士被召捕候ニ付一段之事ニ被 思召候段牧野越中守殿ハ被
仰渡候御書付寫

牧野越中守

常州筑波山ハ賊徒屯集ニ付領分所々ハ人數差出脱走之者共召捕一段之
事ニ付此段可相達旨御沙汰ニ候

第三十二

同斷土屋采女正殿ハ被 仰渡候御書付寫

土屋采女正

常州筑波山ハ賊徒屯集ニ付領分所々ハ人數指出嚴重相固脱走之者共召
捕候段常々申付方宜出張之家來共格別奮發致シ候故之義ト相聞一段之
事ニ候此段可相達旨御沙汰ニ候

五月七日

第三十三

同斷石川若狹守殿ハ被 仰渡候御書付寫

石川若狹守

同文言筑波山ハ人數差出數日相固領分并固場於所々脱走之者共下同

五月七日

第三十四

同斷相馬吉次郎殿ハ被 仰渡候御書付寫

相馬吉次郎

常野兩州之賊徒暴行領分ハ立入候處速ニ人數差出討取又ハ召捕候段領

中取締格別宜一段之事ニ候此段可相達旨 御沙汰ニ候

五月七日

第三十五

同斷土井大炊頭殿等へ被 仰渡候御書付寫

同文言

土井大炊頭

大關肥後守

細川玄蕃頭

山口長次郎

蘆野采女助

第三十六

脱走之浪士和田峠通行之節御人數被差出接戰一段之事ニ被 思召候

ニ付松平丹波守殿へ被 仰渡候御書付寫

松平丹波守

常州脱走之賊徒暴行中山道筋押通候處信州和田峠へ人數差出相固及接
戰候條一段之事ニ候此段可相達旨 御沙汰ニ候

第三十七

脱走之賊徒暴行之節速ニ御人數被指出候一段之事ニ被 思召候付ニ

松平大和守殿へ被 仰渡候御書付寫

松平大和守

脱走之賊徒及暴行候處爲追討速ニ人數指出候條一段之事ニ候此段可申
聞旨 御沙汰候

五月七日

第三十八

同斷松平範次郎殿等へ被 仰渡候御書付寫

松平範次郎

松平飛騨守

榊原式部大輔

真田信濃守

菅沼新八郎	大岡越前守	内藤主殿頭	井上河内守	本多相模守	牧野河内守	土方野千代	堀左京亮	織田山城守	内藤長壽丸	内藤金郎	狄田安房守	松平主水正
金森左京	朽木近江守	松平大藏少輔	松平丹後守	内藤志摩守	内藤若狹守	前田丹後守	市橋壹岐守	松平稠松	分部若狹守	三宅備後守	小笠原左衛門尉	松平伊賀守

同文言

第三十九

賊徒追討之節格別骨折候ニ付松平周防守殿御家來銀子等拜領被 仰
付候御書付寫

福原内匠	溝口隼人助	青山峯之助	松平能登守	大久保大隅守	酒井下野守	加納大和守	戸田淡路守
座光寺左京	秋元但馬守	永井肥前守	太田總次郎	安部攝津守	松平縫殿頭	戸田長門守	

銀五十枚
時服三十枚

家老

岡田求馬

番頭

菅野彦太郎

銀三十枚
時服三十枚

江木森衛

物頭

太田八右衛門

銀三十枚
時服三十枚

稻坂才藏

常野兩州賊徒追討之義格別骨折候ニ付銀子等被下之

松平周防守家來

石川彌五左衛門

黒田平藏

石井源治

戰死之者

用人

石川重左衛門

同士分

拾人

手負之者

九人

金五兩ツ、

常野兩州賊徒追討之節戰死并手負之者共へ爲御手當書面之通被下候間
戰死之分ハ其身寄之者へ爲取候様可致候

戰士

百拾六人

足輕

八拾人

銀六百枚

無席

拾五人

同文言之内銀子被下之間勳功之優劣ニ應シ爲取候様可仕候

五月十四日

第四十

同斷丹羽左京大夫殿御家來拜領物被

仰付候御書付寫

丹羽左京大夫家來

家老

日野源太左衛門

銀五拾枚
時服三

番頭

大谷 鳴海

銀三十枚
時服三ッ、

物頭

大谷 與兵衛

銀二十枚
時服三ッ、

植木次郎右衛門

成田又八郎

寺田次郎介

水野九右衛門

小川平助

大目付

味岡繁右衛門

留主居

日野七郎治

常野兩州賊徒追討之義格別骨折候ニ付銀子等被下之

五月十四日

丹羽左京大夫家來

戰死之者

金拾兩ツ、

同七兩ツ、

同五兩ツ、

常野兩州之賊徒追討之節戰死并手負之者共へ爲御手當被下候間戰死之分ハ身寄之者へ爲取候様可被致候

五月十四日

第四十壹

同斷堀田相模守殿御家來へ拜領被 仰付候御書付寫

堀田相模守家來

惣奉行

平野縫殿

士分 四人

同足輕

三人

手負之者

士分 二人

銀五十枚
時服三ツ、

銀三十枚
時服三ツ、

銀二十枚
時服三ツ、

山比善兵衛
倉須甚太夫

番頭

香宗我部隼人

岡新兵衛

忍田源兵衛

大目付

中澤央

安並織之進

高岡宗左衛門

栗田權之丞

宮崎傳治

常野兩州賊徒追討之節格別骨折候ニ付銀子等被下之

堀田相模守家來

戰死之者

士分壹人

手負同

三人

金拾兩

同五兩ツ、

常野兩州賊徒追討之節戰死并手負之者共ハ爲御手當被下候間戰死之分ハ身寄之者ハ爲取候様可被致候

五月十四日

第四十二

同斷松平右京亮殿御家來ハ拜領被 仰付候御書付寫

松平右京亮家來

武者奉行

津田惣左衛門

銀五十枚
時服三

小頭武者

淺井虎之助

宮部東馬

旗奉行

高木會輔

留主居

菅谷團次郎

物頭

宮部八三郎

嶋田彌七郎

松井清左衛門

銀二十枚
時服三ツ、

常野兩州賊徒之節格別骨折候ニ付銀子等被下之

松平右京亮家來

金拾兩ツ、

戰死之分

士分三十人

手負之者士分并

足輕

拾四人

同五兩ツ、

常野兩州賊徒追討之節戰死并手負之者共へ爲御手當書面之通被下候間
戰死之分ハ身寄之者へ爲取候様可被致候

五月十四日

第四十三

同斷板倉周防守殿御家來拜領被 仰付候御書付寫

板倉周防守家來

番頭

松原牧之丞

銀三十枚
時服三

銀二十枚
時服三

旗奉行

澀川幸之助

栗屋惣左衛門

物頭

吉川喜兵衛

澀川増太郎

常野兩州賊徒追討之節格別骨折候ニ付銀子等被下之

板倉周防守家來

戰死之者

物頭

内藤豊次郎

目付

小菅庄兵衛

銀五拾枚ツ、

金拾兩ツ、

同士分并足輕共

貳拾四人

手負之者

五人

同五兩ツ、

常野兩州賊徒追討之節戰死并手負之者へ爲御手當書面之通被下候間戰死之分ハ身寄之者へ爲取候様可被致候

五月十四日

波山記事卷十一終

波山記事

波山記事卷第十二

目次

- 一 松平大炊頭殿始末
- 第一
- 一 大炊頭殿水戸御出張之義ニ付風説書寫
- 第二
- 一 同斷水府戰爭之義ニ付探索書寫
- 第三
- 一 同斷武田伊賀守等計略ヲ運シ候義ニ付探索書寫
- 第四
- 一 武田伊賀守等大炊頭殿ノ附屬一舉シテ水府ノ込入可申品々之義ニ付探索書寫

第五

一大炊頭殿全浪士に被相與候等之義ニ付探索書寫

第六

一大炊頭殿并武田伊賀守等計略之義ニ付探索書寫

第七

一双方陣取爭戰之義ニ付風說書寫

第八

一大炊頭殿水戸様御名代トシテ水戸表御下向等ニ付探索書寫

附

松平主税頭殿永蟄居被仰付候御書付寫

第九

一大炊頭殿之義ニ付貞芳院様深ク御心配被遊依之書生等存込御聞届相成候御書付寫

附

書生等存込書寫

第十

一御家來之内大炊頭殿に諫言申上候由風說書寫

第十一

一大炊頭殿降參之義ニ付探索書寫

第十二

一大炊頭殿降參之節大略調書寫

第十三

一大炊頭殿等切腹被仰付候義ニ付風說書寫

第十四

一切腹被 仰付候者名前調寫

一水府處置始末

第一

一 水戸様御家中内揉之義ニ付探索書寫

第二

一 浪士共蜂起ニ付水戸様鎮靜方被仰渡候御書付寫

第三

一 水戸様御一同御出仕被成候様土屋采女正殿 御家來ニ御達御書付

寫

第四

一 水戸様御鄙怯之御處置ニ付探索書寫

第五

一 大平山集屯之浪士共今以鎮靜無之追々増長之由能々説諭致シ一同速ニ水戸表ニ引取候様御取計可有之云々水戸様御家老ニ被仰渡候御書付寫

附

別紙御達書寫

第六

一 武田伊賀守等御咎被仰付候書付寫

第七

一 朝比奈彌太郎江戸出府之義ニ付探索書寫

第八

一 朝比奈彌太郎等御役被仰付候書付寫

第九

一 此頃御達之趣水戸様御不服之由ニ付御老中衆御操合之義ニ付某ヨリ之書簡抄

第十

一 浪士方勢盛ニ相成水戸様ニテ早速御引取之御模様無之義ニ付探索

書寫

第十一

一 弘道館文武諸生水府に指出候書付寫

第十二

一 浮浪之徒暴行無御據御人數御指向之義ニ付水戸様御家老等に被仰渡候御書付寫

第十三

一 水戸様御家中石見守父鈴木長門守江戸出府之義ニ付風說書寫

第十四

一 鈴木石見守浪士恐怖之義ニ付風說書寫

第十五

一 水戸書生組ニテ穢多ヲ召仕候義ニ付風說書寫

第十六

一 水戸書生組ニテ所々手配之義ニ付探索書寫

第十七

一 武田伊賀守等地方先納致間敷義ニ付水戸表ニテ被相觸候書付寫

第十八

一 浪士隨從之者今更後悔之者歸村御差許ニ可相成夫々役所に可申出云々之義ニ付水戸表ニテ被相觸候書付寫

第十九

一 水戸様御家老女中江戸出府之義ニ付探索書寫

第二十

一 水戸擾亂後之風說書寫

一無慮雜集

第一

一 水戸道中筋探索書寫

第二

一奥州道中筋探索書寫

第三

一同斷

第四

一御目付某 公義御目付衆御旅館に罷出御直々相伺候廉々相達候書簡寫

第五

一浪士益盛ニ相成候ニ付某ヨリ差出候見込書寫

第六

一上州厩橋木崎宿張札寫

第七

一當時流行謠寫

第八

一水戸與八丸様京師ヨリ常州浪徒御追討御出陣之節桑名藩某詠候詩一首寫

波山記事卷第十二

松平大炊頭殿始末

第一

大炊頭殿水戸御出張之義ニ付風説書寫

- 一 松平大炊頭様御儀水戸表御取扱被仰付江戸御出發昨夜土浦泊ニテ今日水戸に御出張之由風聞ニ御坐候處右御先觸壹通水戸在長岡驛ニ罷在候書生組之者共差返シ候由ニ御坐候
- 一 大炊頭様は天狗之者大勢小金邊ヨリ隨從致シ來候由ニテ今日モ早朝ヨリ土浦町に懸リ多人數御通行ニ御坐候
- 一 風説ニハ大炊頭様モ矢張天狗ニテ水戸に御下リニ罷成候得ハ事ヲ生シ可申由土浦邊之風唱ニ御坐候
- 一 其外府中之義通行無之候間駈ト之義相分リ兼申候猶追々可申上候以上

八月七日

第二

同斷水府爭戰之義ニ付探索書寫

一過ル八日松平左衛門佐樣御神位直先松平大炊頭樣御手勢其外小川館諸浪人共不殘府中屯之者共一同惣勢七百人余府中ヨリ水城に繰込候手筈ニテ竹原驛ヨリ片倉邊迄押出候處書生組之人數凡三百人余固有之通行相支ヒ候ヨシニ付大炊頭樣ヨリ御掛合ニ及候處大炊頭樣并御神位丈ハ相通可申候得共其餘國賊ニ等シキ類ハ壹人モ通行爲致間敷由ニテ片倉之先小鶴川之板橋ヲ取放シ歩立ニテ一人ツ、渡リ候大板ヲ布キ嚴重ニ取固罷在候ニ付大炊頭樣方ヨリモ品々御懸合相及候上同十日朝ニ至リ大炊頭樣御一手丈ハ御通行之事ニ相成小鶴橋^{橋カ}モ元之如クニ板ヲ並へ書生組モ追々引去候ニ付小岩田村ニ旅宿罷在候武田伊賀守モ一同長岡驛邊に押出候得共何之様子モ無之段々吉田村ニ至リ候得ハ城方之者數人

相固居候ニ付右之趣又々懸合ニ及候處矢張前同様大炊頭樣ハ御通シ可申上候得共其餘ハ不相成押テ通行致候ハ、縦大炊頭樣ニテモ討取可申由斷候テ皆々引去爭戰之模様トテモ相見得不申次第第ニ人數引上候様子ニ付察スル處ハ御名代大炊頭樣御威光ニ恐レ容易ニ殺代^{殺カ}之所業ニ相成兼候譯ニ相心得候テ大炊頭樣御人數大勢前後相固水戸臺町吉田大明神之社前迄罷越候處ニテ兼テ之相圖ト相見得右明神社内邊ニテ狼烟相揚リ大砲モ數々相放候故府中并穴倉村ヨリ罷出候人足共農兵體之者共大ニ狼狽致シ逃迷候由其近邊之山林ヨリ伏兵起リ立聞之聲ヲ發シ行過候寄手は前後左右ヨリ押懸リ大小砲雨之如ク打出候ニ付寄手散々ニ罷成武田伊賀守ハ馬上ニテ具足ヲ著ケ槍ヲ合セ戰候由始終如何相成候哉大炊頭樣武田共ニ危ク相見得申候由同夜五ツ半頃砲聲相止申候由一説ニ大炊頭樣ハ吉田村藥王院ニ潛ミ被居候由ニ御坐候其場ヨリ逃レ去候人足并農兵之分街道ヲ横切松川邊に相懸リ候處民兵之固等有之落武

者ト見受鐵砲竹槍ニテ取り圍ヒ既ニ可被討取之處全ク人足之者ニテ不計戰場に出逢ヒ候由申斷漸々遁レ歸候由ニ御坐候

一浪人共去月廿五日水戸城下迄押寄放火致シ猶又今般大炊頭様等大勢水戸に押寄セ候風聞有之候ニ付前中納言様御廉中様以外御立腹ニテ右浪人共壹人モ城下に押入候ハ、無用捨討取可申由御差圖有之趣尤此上當中納言様御下被成候共容易ニ入城爲致間敷由内々被仰出候由風説ニ御坐候

右戰爭勝負之義ハ睨ト相定リ兼候得共右場所ヨリ逃レ歸候人足共ヨリ承リ拔此段申上候以上

八月十四日

第三

同斷武田伊賀守計略ヲ運シ候義ニ付探索書寫

一子八月十日松平大炊頭下向ニ付出迎トシテ書生方天野井家來水戸入口

吉田ト申處の出張ニ相成候處長棒之駕籠ニテ武田伊賀守大炊頭ト僞參リ候間書生方ニハ誠ト心得候處天野井家來に切懸俄ニ鐵砲打出シ出迎之人數迄打懸ラレ書生二三人手疵ヲ負夫ヨリ吉田明神之森ニ楯籠リ臺町藤柄町之家々ヨリ疊持出シタテニ取リ土俵ヲ拵玉除之土手ヲ築キ合戰用意ヲ始候夜ニ入候テ人家ヲ打撥シ箭火焚水戸城嚴重ニ相固候ニ付浪人共イタシ方無之處に上町下町ヨリ何千人共ナク鯨波之聲上リ候得ハ浪人ウロタヘ逃去候者跡ヲ見分イタシ候得ハ多分人形に塗笠ヲ冠セ井荷物百五拾駄駕籠十五挺銘々之名札附有之候

松平 大炊頭 三本 左太夫

加藤八郎太夫 榊原新右衛門

渡邊宮内右衛門 飯田 宗藏

白井忠左衛門 松平平左衛門

谷 鐵藏 里見四郎左衛門

大久保 甚五右衛門	三本 彌太夫
門奈三左衛門	小池源太左衛門
庄司 辨吉	山岡 喜八郎
武田 伊賀守	林 忠左衛門
鳥井 瀬平	鳥井 彦右衛門
山中新左衛門	中山 民部
立原 朴次郎	富田 三保之助
岡田 新太郎	三好 衛門八郎
長谷川 彦之介	長谷川 彌次郎
梶 清左衛門	梶 次郎三郎
梶 源八	武田 魁助
太田 原傳内	

外ニ
北ハ 村田 理助
南ハ 新井 源八郎
西ハ 真本 彦之丞
東ハ 村田 正五郎
四郡奉行

〆三拾七人

右ハ兩掛合羽籠長持合藥玉箱品々名札附有之候水戸評定所引取ニ相成候

第四

武田伊賀守等大炊頭殿の附屬一舉シテ水府に入込可申品々之義ニ付探索書寫

一先達テ中御老中御宅の水府御家老鳥井瀬兵衛大久保甚五左衛門榊原新左衛門等御呼出之上武田伊賀守召捕候様被仰渡候ニ付十四五日之間伊賀守小金ヲ去リ身ヲ隠シ居候由小金人數之者モ一向相分リ不申不審致居候由其後立戻リ壹人之客有之旅宿之別亭寺之由指置腹心之家來一

兩人外相入不申五六日密談有之由是ハ大炊頭殿ニ相違無之由

一大炊頭殿申立ニテ水戸表取扱之爲被相下候由尤公邊ヨリモ御内意ハ有之由武田等初メ天狗連一字大炊頭殿ハ附屬一舉ニ水府ハ入ラント致計策之由與四郎九殿之木主ヲ持參モ計策之由

一全體與四郎九殿御卒去後 天朝ヨリ攘夷鎖國之爲ニカヲ盡シ病氣ヲモ引受候内官位ヲ授ケラレ候由 將軍家ニテハ官位之事訝カリ不埒ニ相成居候由此度本葬式之爲水戸ハ入ラントイタシ候由之事

第五

大炊頭殿全浪士ハ被相與候等之義ニ付探索書寫

一 小金出張之武田伊賀守過ル四日同所出立水戸ハ趣罷下候等之義ニ付テハ別テ取調相達置候通ニ御坐候處右伊賀守小川館ハ繰込可相成之所府中旅宿之田丸稻之右衛門先カケ繰込相成候ニ付無據宍倉ト申所之濱野茂右衛門ト申ハ理不盡ニ申付上下四五拾人ニテ旅宿外人數ハ近所之百

姓共宅ニ旅宿罷在候由之處右伊賀守手勢之者共松平大炊頭殿此度御下之節隨從之者共一同過ル九日ニ水戸臺町ト申所迄繰込之由之處書生組ヨリ出張大砲打カケ爭戰ト罷成浪人共數人打死罷成候由ニ御坐候大炊頭殿ハ府中藥王院ト申ニ旅宿之由ニ御坐候浪人共追々數輩繰出相成候由ニ御坐候

一 右大炊頭殿御陣屋下宍戸町ハ田中愿藏組浪人五拾人計ニテ罷越金策ニ取懸候由之處百姓共大勢ニテ取固最早愿藏ヲ討取計之處矢玉ヲ盡シ候テ逃去候處大炊頭殿ヨリ玉藥ヲ被與又々押寄候得共百姓共猶モ人數ヲ催シ大勢ニテ差向打發シ候由ニ御坐候大炊頭殿ヨリ玉藥ヲ與不申候ハ、大半討死可相成之處百姓共殘念之由ニテ直ニ宍戸陣屋ハ亂妨之上火ヲカケ候由ニ御坐候御自分下町ハ浪人押入候ヲ百姓共舉テ憤リ追拂候ハ格別却テ浪人共ハ玉藥ヲ與へ候様之義ニテハ全天狗ト組シ居候譯ト外相見得不申尤水戸ハ入城可相成趣ニ相聞得申候事

一 武田伊賀守過ル五日ニ穴倉村茂右衛門所ニテ旅宿惣勢五百人計之處八日未明ニ同所出立大炊頭殿行カ隨從之者ハ荷擔同九日ニ水戸ニ趣候由ニ御坐候處穴倉ヨリ府中ニ繰出之節ハ右手勢五百人程之處多分逃去漸百二三十人計ニモ罷成候哉ニ相聞得申候事

第六

大炊頭殿并武田伊賀守等計略之義ニ付探索書寫

一 松平大炊頭殿ハ全天狗元帥之姿ニ相聞得御同所ハ天狗組一統附屬兎ニ角柳連ト戰爭之勝敗之次第ニ寄此後如何成行可申哉豫元ヨリ相違兼候ハ勿論之事ニ有之候得共筑波山ハ何ニ根城ニ構候譯ニモ可有之哉已ニ西岡邦之助等歸山土手等築立再勢之勢ニ相聞得右ニ付追討田沼殿始段々繰込常州笠間侯御人數ハ筑波山續キ椎尾山脇松石峠ト申ハ御警衛之由土浦侯ハ筑波麓小田村ハ出張ト申唱松平下總守殿ニハ宗道河岸ハ已ニ著ニ相成候由旁愚考仕候處大炊頭殿并伊賀守始水府ニテ戰爭勝ヲ取

候ハ、直々入城可仕又敗北仕候ハ、筑波山籠之手配トモ相見得申候一説ニハ彌敗ヲ取候時ハ霞浦ヨリ乗船長州ハ著岸一纏ニ相成候風説乍去權奸之深意虚實逆モ傍觀探索治定之義相分兼先以當今之所承リ拔候趣ニ基キ相違候迄ニ御坐候

八月十五日

第七

双方陣取爭戰之義ニ付風説書寫

松平大炊頭殿其外武田伊賀守何レモ當時松川之陣屋ニ罷在候由磯ノ濱新臺場ハ陣取大砲相備罷在候由又書生組之方ハ税町祝カ願入寺ト申ハ陣取過ル十二日ヨリ日々之様戰之由ニ候得共勝負之儀如何相成候哉未暇ト不相知由ニ御坐候

八月

第八

大炊頭殿水戸様御名代トシテ水戸表御下向等ニ付探索書寫

附

松平主税頭殿永蟄居被仰付候御書付寫

一松平大炊頭殿義當八月十日朝片倉宿出立致シ水戸中納言様御名代之趣ヲ以水戸表ヨリ入城可致ト相巧武田岡田三木等之者郷士農兵共貳千人余召連大炊頭前後警衛致シ水戸下町邊ヨリ相向繰込候處書生方下町七軒町邊ヨリ大砲打掛井ニ小筒等打懸候ニ付農兵共四百人余打殺サレ候ニ付大炊頭殿義始武田岡田三木等之者漸々水戸臺町藥王院ヨリ逃込候處右寺ヲ書生方取巻候ニ付那珂湊館ヨリ引籠可申體ニテ右寺出立致シ候處祝町岩舟山之裏境内ヨリ大砲井小筒等打懸候ニ付死人怪我人數不知右ニ付彼所ヲ漸々逃去所々ヨリ散亂致シ屯罷在候義ニ御坐候

但五人七人位ツ、逃散候者打殺切殺等所々ニ有之候由ニ御坐候

一松平大炊頭殿義當分松平大學頭殿御領分常州茨木郡松川村御陣所ニ罷

在申候

但松平主税頭殿ハ宍戸當領主大炊頭殿之親ニ候由水戸中納言様御弟ニテ御隠居之御身分ニ候處武田岡田三木鳥居等差略ヲ以御連去候由水戸領百姓共相妨宍戸ヨリ御入國不相成殆困入候由殊ニ宍戸御家來ハ付添無之御隠居付之士少々付添居候由御坐候

一武田伊賀守岡田新太郎三木左太夫鳥居瀬平神原等當分常州茨木郡之濱續キ大野村ニ罷在候由ニ御坐候

但農兵郷士百姓共多人數付添居候由

一水戸表騒動一件ニ付中納言様爲御名代松平大炊頭殿過日此表御發途相成水戸様ヨリ御家老鳥居瀬平初三人并番頭若年寄其外多人數御添被遣候處一昨日ヨリ御城ニオキテノ風説ニハ浮浪之徒ヨリ大炊頭様ヲ擒ニイタシ候共申又ハ浮浪之徒次第々々ニ大炊頭様ヨリ付四千人計之人數ニ相成ドウヤラ大炊頭様浮浪之徒ト御同腹杯ニモ風説仕候然處十六日夜

播磨守様雅樂頭様大學頭様之内御一人外ニ水戸様御家老一人和泉守殿御宅に御呼出有之御家老野中三五郎ハ夜五ツ時頃罷出候得トモ播磨守様御始十七日夜明迄モ有無之御受モナク和泉守殿ハ勿論立合ニ相成候大目付京極越前守大立腹ニテ無據野中三五郎ヲ御名代トシテ別紙之通申渡相濟候由尤封廻狀ハ出シ不申趣右ニ付テハ下説之通大炊頭様ニモテトオカシク油斷不相成ト奉存候ニ付色々差繕ヒ候得共更ニ不相分候小石川同役水戸に密々承候得共是モ爾ト不致趣水戸御領分長岡ト申所之藥王院ト申寺院御旅館ニ相成右近邊之在々所々ハ浮浪之徒入込候由長岡ヨリ御城下ハ里數一里半計之由其間ニ川有之候處水戸御城下ヨリ右之橋切落シ大炊頭様ハ入レ申候得共外ハ入レ不申趣ニテ大モンチャク其後如何之手續ニ候哉難分候得共四五里御廻リ被成當時鹽ヶ崎那珂湊ト申所ニテ寺號失念尤大寺院に大炊頭様御入之由惡徒共二十人或ハ三十人夫々頭取候者付候テ所々在々ハ押入候ニ付男女共恐怖多分逃去

候ニ付自然明家ヲ押領シ米麥等自儘ニ喰ヒ居候或ハ途中ニ惡徒共待伏致候テ水戸様御飛脚ヲ折々劫シ奪取候品モ有之由ニ御坐候
別紙申渡覺

大炊頭父

松平主税頭

隱居之身分ニテ彼是不容易事共ハ關係致シ其上水戸殿ヨリ被仰立候次第モ有之候間永蟄居被仰付候

八月十六日

第九

右於和泉守宅水戸殿家老野中三五郎に申渡大目付京極越前守相越候大炊頭殿之義ニ付貞芳院様深御心配被遊依之書生等存込御聞届相成候御書付寫

書生等存込書寫

一此度大炊頭様御儀中納言様爲御名代御下向被遊候處貞芳院様深御心慮被遊大炊頭様御初惡徒之外御家中之族一同無事ニ御連被遊度由ニテ蒙仰之趣モ有之候處書生其外ニモ深存込候義モ有之由ニテ無事ニ御通行相濟可申哉難計候ニ付此上存念之有無書生等一統一組切ニ書出否申出候様可致事

書生等存込書寫

一此度大炊頭殿爲御名代御國中爲御取締御下向ニ相成候ニ付テハ速ニ御入城願之義ハ勿論之義ニ候得共左之ケ條如何之次第ニ御坐候哉難心得筋有之候處一々御答承知イタシ度候事

一武田伊賀守其外大平山筑波山等ニ屯集致候者共於途中遮テ奉願候得共何モ可取計モ可有之候處無異義召連ニ相成候事

一應接之節此方人數欺キ致砲發兵端ヲ開殊ニ目付御使番等ニ砲槍ヲ打懸候事

一應接之節小十人目付鈴木八右衛門義ヲ人數ニテ引參切害致候事

一磯濱ヲ亂妨イタシ願入寺ヲ燒拂寶藏ヲ打破リ火ヲ指候事

一湊御殿異寶閣ニ大砲ヲ打カケ且市中ヲ燒拂老若男女之無差別切殺シ候事

一中納言様御名代ニテ御下向ニ相成御沙汰ナク川筋御通行ニテ潛ニ書生館ニ繰込候事

右之次第不容易被致方ト奉存候事

八月廿一日

第十

御家來之内大炊頭殿ニ諫言申上候由風説書寫

當月初旬頃穴戸侯家來ニ木村小二郎其外數人君上ニ諫言ヲ入候處取用無之候ニ付各割腹致候由相聞得申候

九月廿九日

第十一

大炊頭殿降參之義ニ付探索書

一常州磯濱邊屯集浪士之内に加里候松平大炊事戸田五介手の降參ニテ附屬之者共一同江戸表に召連五介出府之積途中迄罷越候水府本陣田沼玄蕃頭殿ヨリ引戻シ相成水戸町會所に入置松平万次郎預リ人被仰付家來ハ揚屋又ハ入牢相成其節重立候家來之内八人自殺又ハ差違相果候由

此松平万次郎ハ水戸殿御由緒有之三千石ニテ村脇陣屋住居之由

一松平大炊降參ニ出候事之起去月廿二三日湊近邊浪士巢穴追討之節御代官北條平次郎手ニ屬シ候關東取締出役田中銚之助ト申者本多修理人數大砲方歩兵方一同ニ押寄候節右銚之助壹人後レ引揚遲ク相成候處敵方ヨリ鐵砲打懸候故暫ク平^{次郎}玉ヲサケ居候處拾三四人取テ返シ取卷既ニ鎗ニテ肩先突懸迎モ助命難相成ト覺悟致シ自己ノ意ヲ以右銚之助申條ハ松平大炊殿又ハ水戸全ク之藩士等浮浪惡徒之名ヲ蒙リ官軍ニ敵對致

候哉申譯等モ有之ハ其御目付に可申達旨申候處中ニ壹人進ミ寄候ハ水戸殿小十人目付ニテ先頃小金出張之節見覺モ有之者ニテ申候ハ左候ハ、湊松平大炊殿宿陣に同道可致旨ニテ數人ニテ取卷右陣所に參リ大炊殿其外面談前々之通り申述候處素ヨリ天下に對シ可敵存寄無之處全水戸書生組ニ欺レ賊徒之名ヲ蒙リ殘念ニ付自是速ニ使者ヲ以右之申譯可致處手延相成居内昨今手詰之戰爭中殘念ニ存居候折柄ニ付是非取持和睦整吳様ニ談有之使者トシテ重役貳人同道遣候間御目付方に引合頼候由被申聞右使者同道ニテ五介殿宿に罷歸候趣全一時之計策ニテ申述候ヨリ事起リ今日之次第ニ相成候由御坐候
町會所ヨリ乗物の青綱ヲ懸ル

松平大炊

預リ人

松平萬次郎

三千石

大炊家來

水戸殿ヨリ附

山中新左衛門

家老

菊池庄助

用人

中井久馬

同格物頭

木村小次郎

菊池勝五郎

外三十人内七人自殺ニテ首ヲ自分ニ持居候由

水戸殿家老

鳥居瀨兵衛

揚屋入

從者三人

入牢

大久保甚五右衛門左カ

揚屋入

同人梓壹人

同

丹羽兩介

同

片岡爲之丞

八人

大炊家來之由申立

水戸殿家來

檜山金之助

外 六人

右何茂水戸殿に引渡

十月

第十二

大炊頭殿降參之節大略調書寫

一 九月廿二日戰爭之後夏海村本陣戸田五介殿方の河野伊豫守殿安部進太郎殿出席廿六日夕七ツ時頃御代官佐々井半十郡殿案内ニテ宍戸侯先挾箱打物長柄等格之通牽馬壹疋其外鳥居瀨兵衛等惣人數五拾人余參著尤

人數ハ協合ニ爲控置宍戸侯士壹人草履取壹人ノミニテ罷出早々半十郎殿取扱ヲ以公義ニ對シ逆意挾候筋無之由申立應接相濟同廿七日柵倉侯人數磯ノ濱ニ罷在候分不殘引上宍戸侯ヲ警固致シ松川泊ニテ追々歸府可致模様之處水戸道中西郷地村ニ水家戸脱カ之使者兩人出張致シ居宍戸侯其外共水府ハ引渡候様懸合有之追々水戸ヨリ人數貳百人余繰出異義モ候ハ、手荒之懸合ニモ可及様子ニ付戸田五介殿牧野總太郎殿兩人田沼玄蕃頭殿本陣水府好文亭ハ御越ニテ御相談之上水藩松平万次郎ハ御預ニ可相成由ニテ西郷地村ヨリ同廿八日夕七ツ時水戸下町之町會所ニテ宍戸侯其他一同水家ハ引渡相成候處各刀カ双方ヲ可差出由懸合有之候節其席ニテ割腹致シ候者七人有之由左之通

宍戸侯御家來井水戸家ヨリ被附候者其外江戸撃劔家之類有之由ニ相聞得候

山中新左衛門

菊地良助

平井久馬	木村小次郎
中村信一郎	木幡友七郎
菊地彌五郎	田山庄五郎
中野金吾	長倉駒吉
茅根寅三郎	新倉本達
岡本八郎	庄司辨吉
鈴木盛吉	近藤隼吉
自殺 小堀小吉	自殺 三宅甲内
自殺 海老澤越之助	箕輪德之助
鶴田七三郎	小川菊次郎
平山祐五郎	根本一之助
時田半之助	新倉桂二郎
箕輪寅二郎	高野金之助

自殺

島崎次郎

岡本三百之助

持田銚太郎

菊地新六

佐々木銚吉

水戸殿家老

同

鳥居瀨兵衛

大久保甚五右衛門

從者

從者

其外拾四人

惣人數五拾人餘

第十三

大炊頭殿切腹被 仰付候義ニ付風説書寫

一 宍戸侯水藩松平万次郎方に御預ニ相成被罷在候處 公邊大御目付黒川近江守殿御目付羽田十左衛門殿設樂彈正殿御徒目付三宅修平平塚重三郎御小人目付宇佐美喜三郎河野治三郎等一同出席御勘定吟味役屋代増

之助係リニテ於万次郎宅ニ再應御吟味之筋有之過ル五日切腹被仰付候御徒目付平塚重三郎大炊頭に短刀ヲ與ヒ候處四五尺跡に平伏致シ候節水藩名前不知者後ヨリ首ヲ討候由

一 宍戸侯家來其外水戸家老等 公邊御目付御徒目付御小人目付等出席關東取締出役吉田喜平治懸リニテ吟味致シ取調相濟候上水戸家に御預ケ罷成居候處過ル十日鳥井瀨兵衛切腹被仰付同十六日大久保甚五右衛門外四拾余人之者斬罪被行候由

一 宍戸公切腹後家老菊地庄助於水戸評定所公邊御目付其外役々立合人拂ニテ四日之間詰問致候處先年櫻田一件大炊頭差圖ニ及候由水藩大竹元之助有原半彌等同斷ニ有之由白狀ニ及當月三日夜同人入獄ニ罷成候由一 宍戸侯在府之節目白臺之邸に公邊御旗元名前不知者三四人ツ、日々罷越小金驛詰其外浮浪一件及密談夫々周旋致シ候者有之由右家老菊地庄助逐一及白狀候由

第十四

切腹被仰付者名前調寫

十月五日松平大炊頭様切腹被 仰付翌日水府下町會所ニテ八人切腹名
前左ニ

松平大炊頭様

同家來

中野金吾

小幡友七郎

三宅軍内

小堀小吉

海老野慶次郎

長倉駒吉

中野新一郎

右主從八人切腹外ニ入牢拾壹人

水府處置始末

第一

水戸様御家中内揉之義ニ付探索書寫

一 水戸國內此節餘程混雜仕候様子ニ相見得申候其故ハドコマテモ攘夷ト
申事ニテ夫ニハ只今之水戸侯ニテハ兎角御決斷無御座事機ヲ失ハレ候
事ノミ多ク中々大事ヲ御荷負被遊候君徳不被爲在依テ此節ニ當リ社稷
ヲ重トナシ國君ヲ輕ト至シ候說杯相唱ヒ候族モ不少當水戸侯ヲ廢シ候
上御上京被致居候與四丸様ヲ水戸侯ニ立上可申其黨類互ニ相盟約專其
企ニ御座候處自然當水戸侯黨之耳ニ入兎角良丸様御存生ニテハ國家之
大難ニ相及可申於京都ヒソカニ毒ヲ進候由ニ御座候併表向ハ何カ瘍疔
之類御發シ此節御大病ト申成シ置候得共實ハ疾ニ御死去ニ相成候ニ相

違無御座由ニ御坐候然處右一事攘夷黨之耳ニ相入甚憤激既ニ暴發ニテモ可致勢ニ御坐候處進毒之事跡極幽味何分證跡不相知夫故只内ニテ計頻ニ相モメ居候哉ニ相聞申候

一 水戸街道水府之目附井徒目付等頻ニ往復仕候間道中ニテ承リ候處何歟水戸ニテ事起リ候ト相見得申候水戸之目付等頻ニ往來仕候節ハ何時モ國亂ヲ生候時ニ御坐候杯申居候處水戸ニテ承リ候事ト考見候得ハ甚有據様ニ相覺申候

第二

浪士共蜂起ニ付水戸様鎮靜方被仰渡候御書付寫

此程攘夷之義申立御領分最寄ノ浪人等多ク相集元御家來或ハ御領分之者共相加リ不穩趣ニ相聞候右ハ横濱鎮港之儀ニ付外國ノ御使等モ被差遣且御上洛御留主中之折柄ニモ有之旁万一御親藩御家來等相加騒亂相發候様之儀有之候テハ以之外之儀候間取鎮方嚴敷取計可有之尤御料

私領引合候ハ、時宜次第御打合有之候様可被申上候

四月

第三

水戸様御一同御出仕被成候様土屋采女正殿等御家來ノ御達御書付寫

土屋 采女 正

松平 大炊頭

水戸殿ヨリ被仰立候趣モ有之候ニ付御同人御出仕之節御誘引有之候ハ、同様御出仕候様可仕銘々家來呼可達事

四月廿三日

第四

水戸様御鄙怯之御處置ニ付探索書寫

一 浪士追々如何様之御所置ニ相成可申哉是又探索仕候處此度之義ハ不容易譯ニテ是非共取鎮不申候得ハ不相成併シ大勢之義水府家老等之周旋

ニテハ中々以鎮リ申間敷依テハ水府公御直々被爲入御取鎮之方可然ト御老中方類ニ申上候得共水府公更ニ御聞入無之由其譯ハ此度蜂起仕浪人共ハ以前罪狀有之者ニテ夫ニテ御呵相成居候者ニ御坐候處一昨年轉法輪三條殿 敕使ニテ爰元ハ被爲入候節右罪人之者共 救命ヲ以悉御許ニ相成候ノミナラス其節迄御取用ニ相成候鎮論家水府ニテハ鎮論家過激家ニ屬ス之役人大抵被相退候右過激之罪人御取用ニ相成夫ヨリ右之者勢ヲ得候テ勝手次第過激論ヲ相發候得共 公邊ニテハ何事モ因循之御處置故益拔扈仕自然此度之一條ニ相及候事ニテ其實ハ敕許之盜賊共可申者ニ御坐候左候得ハ中々相鎮リ申間敷ト之譯ヲ以水府公御直德御斷ト相見得候得共御内實ハ柔弱之御方ニテ此度之一條至極御恐怖被遊追々國家之存亡ニ相係リ候共不得止事ニ有之ト之思召ニテ御直德等之義ハ夢々思食不被爲在御様子ニ相聞得申候右ニ付御老中方モ殆ト困却之御様子ニ御坐候去ナカラ此儘被差置候テハ益盛ニ相成可申早々近國之諸侯ハ被

仰付御征伐被遊候御吟味ト相見得候得共是又不容易事ニ御坐候得ハ先以水府鎮論家之者ハ鎮撫方被仰付其上ニテ眞ノ御征討ニモ相成候哉ニ相聞得申候是ハ因循姑息之御所置不遠爭亂ニ相成候外無之義ト奉存候

于四月十三日

第五

大平山集屯之浪士共今以鎮靜無之追々増長之由能々説諭致シ一同速ニ水戸表ハ引取候様御取計可有之云々水戸様御家老ハ被仰渡候御書付寫

附

別紙御達書寫

水戸家老

御家來井御領分之者共外夷ヲ攘ヒ御國害ヲ除キ贈大納言殿之遺志ヲ繼候由申唱筑波大平山等ニ多人數屯集罷在候段不穩所行ニテ人臣之道其

君ヲ致補佐候事當然之義ニ候間爲國家存付候義有之節ハ先第一ニ主君
 致建白再三ニ及聞入無之候共百諫^大千 死ヲ以相爭誠意ヲ以相感候様
 可取計筋ニ候然ニ中納言殿ハ申立モ不致彼等自ラ先君之遺志ヲ被爲繼
 候事ニハ相成間敷ト見侮リ多勢之威力ニテ上ヲ劫制致候筋ニテ人臣之
 道ニ相背不届之至ニ候殊更自國之領内ニ罷在ラス他領ハ押出神輿通行
 杯ト申唱旅宿ハ御紋付之幕ヲ張宿々村々之人馬ヲ遣ヒ諸方爲致騷擾公
 法ヲ犯シ加之諸家脫藩之徒ヲモ黨類ニ相加ヘ候故已ニ右等之者共機ニ
 乘シ軍用ト號シ他領ニテ押借同様金子數多爲差出候杯以之外之事トモ
 相聞得候元來攘夷等申立候上ハ軍律ヲモ可辨居筈ニテ於軍律士卒末々
 之者タリトモ民ヨリ聊之物ヲ借取杯イタシ候ハ、直様典刑ヲ正シ^{脱アルカ}ヘキ
 ハ勿論之事ニ候處右體之次第ニテハタトヘ後日攘夷之命下リ候共軍律
 不相立成功之程モ無覺束況ヤ堂々タル御親藩ニテ軍用之御蓄^{蓄カ}無之浮浪
 之徒ヲ相語ラヒ諸方ヨリ金子ヲ借集候杯世上之嘲ヲ被受候ハ、水戸家

之御耻辱無此上候夫我主君ヲ蔑如シ公法ヲ犯シ耻辱ヲ取り此三罪ニ陷
 リ候テモ贈大納言殿之遺志ヲ繼ト可申哉銘々自省候ハ、其理ハ明白ニ
 可相分候一體右様之輩速ニ嚴科ニ可被處筋ニ候得共其初報國之心ヨリ
 事起リ候趣ニ相聞聊可所置^{誤脱アルカ}モ有之且中納言殿ヨリ何レニモ御取鎮可被
 成暫時御猶豫有之候様被成度段被仰立モ有之候ニ付御任セ被置候處今
 以鎮^て穀無之追々增長百姓共難義不少候間前書之趣能々說諭致シ一同速
 ニ水戸表ハ引取候様御取計可被有之候
 右之趣可被申上候事

五月

別紙御達書

水戸家 老

別紙之通相達候ニ付テハ他所ヨリ寄集候者共散行何様之義可仕出モ難
 計假令右様之義無之候共押テ金錢爲差出候類不相止候間別紙之通觸書

差出候就テハ心得違之者無之様末々迄急度被申付御家來等御在所ヨ引
 取候共取締相立異形之體等不致神妙ニ往來爲致其餘是迄御家來之名目
 フ以關所等相通シ又ハ人馬爲差出候者共之内ニモ他所之モノ加リ罷在
 候哉ニ相聞得若右體之義モ候ハ、以來關所印鑑等猥ニ不相取様御締相
 立御在所ヨリ往來之御家來タリトモ旅行之節ハ舊獵相觸候通道中奉行
 相違先觸差出尤御在所ヨリ出府之節人馬遣モ少ク通例之分ハ江戸著
 之上可相届且今般大平山筑波等ヨ爲取鎮被差遣候分其度々名前道中奉
 行ヨ相達候ハ勿論之儀御在所往來トハ譯違候間人馬遣候ハ、道中奉行
 問合候上先觸可被差出候尤右様相成自然他所ヨリ寄集候者共舊里ヨ
 難立歸差支候ハ、其段可被申聞候事

五月

右御觸書御諸家討手始末ニ載ス

第六

武田伊賀守等御答被 仰付候御書付寫
 五月廿七日小石川ヨ御用召

慎隠居

御用達

武田伊賀守
 興カ 津藏人
 中山與三右衛門
 御側御用人

同 美濃部又五郎
 同 山國兵部
 同 岡田信濃守
 同 杉浦兼次郎

第七

朝比奈彌太郎等江戸出府之義ニ付探索書寫

波山記事卷十二

朝比奈彌太郎

佐藤圖書

市川三左衛門

渡邊半介

芦澤祐七郎

名前不知

士分之者

是ハ一昨廿八日松戸宿旅籠屋權四郎方の止宿之分

外旅籠屋止宿分

四百六拾三人

右之外小金町ニモ廿人止宿其外百姓共一刀ニテ百人余兩宿ハ止宿右百姓ハ天狗派之者ヨリ金子被貪取候者之由ニ相聞得何哉昨廿九日晝後千住通行ニテ江戸駒込屋敷ハ著相成候由ニ御坐候

鐵砲大小取交

四拾壹挺

玉藥入胴亂

拾壹

弓

拾九張

木太刀六尺棒

廿六本

右品々ハ前條之者共水府ヨリ持參之處松戸宿御關所ニテ差留候故松戸宿右權四郎方の預置候由且多數出府ニ付宿々心配致シ候處決シテ心遣ヒ致間敷水戸殿御家來ニハ有之候得共盜賊組トハ違ヒ候旨申諭神妙ニ通行致シ一體風俗モ穩ニ相聞得申候

第八

朝比奈彌太郎等御役被仰付候書付寫

六月朔日小石川の御用召

御用達被仰付

朝比奈彌太郎

佐藤圖書

市川三左衛門

戸田銀二郎

御用達再勤

若年寄再勤

渡邊半介

御目付

輕部熊太郎
朝倉清七

右之通相成候由御坐候以上

第九

此頃御達之趣水戸様御不服之由ニ付御老中衆御揉合之義ニ付某ヨリ之書簡抄

前文略時々野州大平山一件之義ハ追々御承知モ被爲在殊ニ御旅中ニオキテ右實事ハ粗御承知之義ト奉存候得共御出立前御沙汰之趣モ被爲在候ニ付漸々抜取相認差上申候併シ多端之中相認差上候テモ道中日數相懸リ候故何レ御承知後ニ相成可申ト奉存候義ニ御坐候

一昨七日之注進ニテ夫々最寄大名ハ警衛人數指出方等之御達モ有之勿論今日有馬兵庫頭様ヨリ届參リ候者之咄ニ承リ候處野州栃木町ニオキテ

及暴發候由之處浪士之方ニモ餘程怪我人モ有之何分不穩事ニテ扱々當惑仕尤此程水戸様御家老ハ御達相成候御書付等ハ御一覽モ被爲在候義ニ付別段申上候迄モ無之候得共其後水戸様ニテ御取鎮モ速ト申事ニモ參リ兼候趣ニ付於營中御老中様方水戸様ハ委細御取鎮方之義御談判被在候趣之處何分御老中様方御談之義水戸様ニオキテ御不服ニモ被爲在候哉追々御高聲之御談判ニ相成板倉様ヨリ水戸様ハ頻ニ御談判相成何分御様子モ不穩御模様ニ付井上様御引分被成候趣ニテ此程中ヨリ御老中様井上様計御登營右ニ付甲斐守ニモ引込罷在漸々昨日牧野備前守様御出勤ト申事ニテ今日晝後ニ甲斐守病氣ニテモ押テ即刻登營可致旨御城ヨリ申來候ニ付登營致候得共未歸宅不仕依之不穩事ニテ實ニ心配之世ノ中ニ御坐候後文略

六月八日

第十

浪士方勢盛ニ相成水戸様ニテ早速御引取之御模様無之義ニ付探索書
寫

先頃浪人征伐之義申立候水藩之内書生組或ハ柳派ト相唱候表家老市川
三左衛門佐藤圖書并朝比奈彌太郎渡邊半助等何千石以上以下歴々之
方々同勢七百人余去月廿七日頃水府近邊千束原ト申所ニテ勢揃致シ右
弓砲等ヲ携土蒲ヨリ松戸通り小石川御館ハ罷出候尤鈴木石見守義ハ其
前五月廿三四日方夜分相忍ヒ出府之由ニ聞得申候右御同意之方ニテ太
田丹波守殿伊藤玄蕃殿中山備前守殿等ハ御國元ニ罷在應援致居候由先
般五月中旬頃 公邊ヨリ水藩之御家老衆御呼出ニテ浪人共屯所早速引
拂候様被仰出殘黨防方等モ御差圖被仰出他所ヨリ相加リ罷在候無頼之
者共諸方ハ散亂可致由捕押方等別テ諸家様ハモ御觸出有之 公邊ヨリ
御代官ハ御取締壹人ツ、付添國分ケニテ廻村被仰出追々御發足ニ可相
成由ニ候處水藩ニテ早速引取候様子相見得不申候前書筑波表ニ屯罷在

候浪人勢焰追々手強ニ罷成不容易義ニ付當分見合ニ罷成居候由専ラ風
聽ニ有之候笠間侯モ追々御下之御先觸有之士浦泊ニテ土浦侯ハ御逢ニ
相成候由之處途中ヨリ御引返ニ罷成候趣ニテ土浦侯ヨリハ御領分北條
村ハ人數差出ニ罷成候由ニ候處昨十四日夕頃猶又御人數被遣候趣ニ御
坐候

六月十五日

第十一

弘道館文武諸生水府ハ指出候書付寫

乍恐 先君烈公告志篇ヲ著シテ廣ク士民ニ諭シ給フ其第一條ニ忠孝之
本意ヲ述サセ給ヒ次ニ人々 天祖 東照宮之御恩ヲ報セントテ惡シク
心得違眼前之君父ヲ差置直チニ天朝 公邊ハ忠ヲ盡サント思ハ、却テ
潜亂之罪ノカルマシキ旨ヲ述サセ給ヒシ事我藩ノ臣子タルモノ何モ心
得可罷在事ニ候處近來狂暴之士民等尊 王攘夷之名ヲカリテ累代厚

恩ノ君上ヲサシ置各其身ノ分限ヲ忘レテ 天朝ノ御明德ヲ奉^{演脱カ}他國浮浪之惡徒ヲ語ラヒ國中無罪ノ良民ヲ苦シメ 德川家御親藩之臣下トシテ妄リニ將軍家ヲ輕侮昇平國恩ヲ忘レテ反亂之大逆ヲ企無體之暴論ヲ以數 君上ニ迫リ奉リ正論之良臣ヲ退ケ賄賂ヲ貪リ私黨ヲ張リ 祖宗之臣度ヲ破リ士民ノ禮分ヲ廢シ加之東西ニ奔走シテ 公武ノ御中ヲ奉妨上下之情ヲ壅塞シテ君臣之通路ヲ絶チ其他之惡業不遑枚舉是ヲ以先君烈公之御遺志ト稱シ我水國眞ノ義勇ヲ輔シ虎狼之國トナシ貪亂無禮ノ盜民ヲ集メテ忠孝篤實ノ世臣ヲ用ヒス終ニハ一國之君臣上下悉ク亂賊ニ陷ランテ眼前ニシテ實ハ却 威義烈三公之尊 王ノ御眞志モ水泡トナリ當時天下之大患ナル外夷ヲ平掃スルモ何ヲ以ナサンヤ如斯ニシテハ水府士民ノ耻辱千歳ノ汚名無此上臣子之身分決テ等閑ニ打過ヘキ時節ニ無之且我々は迄日々弘道館ニ出入シ文武ノ業ヲ勤メテ以 君上ノ恩ニ報セン事ヲ謀リ今此時ニ當テ國ノ狂暴ヲ除キ賊ノ横行ヲ制ス

ルニアラスンハ何ヲ以テカ地下ニ 烈公ニ見ヘ奉ラレ依之面々忠憤難默止自然一同集會仕候上ハ各心ヲ一ニシ力ヲ合セテ是非黑白ヲ辨明シ是ヲ天下ニ明ニシテ年來ノ誠忠相達シ眼前 君上ノ御配慮ヲ可奉安此段一同之本意誓テ變改仕間敷者也

諸 生 共

第十二

浮浪之徒暴行無御據御人數御指向之義ニ付水戸様御家老等ハ被仰出候御書付寫

御上洛御留主中野州天平山ハ浮浪之徒相集リ其後常州筑波山ハ楯籠民家ハ押入財ヲ奪種々横行之致方有之且小金ヶ原ハ多人數屯集致シ居候者ハ浮浪之一味ニテ有之間敷候得共不輕模樣ニ相聞就中筑波山之者ハ水戸殿家來ニテ浪人致候者多ク謀主ト相成攘夷之義未成功ニ不至ヲ以之外ニイタシ候者モ可有之候得共遠大之思慮無之途ニ無謀之攘夷ニ陷

リ候テハ 救命ニ背キ恐多事ニテ右之急務武備更張之外無之處其義難
堪屯集イタシ候ハ是又可憎ニ無之候得共家來浮浪ニ均敷暴行有之候テ
ハ水戸家之御名義不相立ノミナラス其儘於被指置ニハ幕府之御職掌モ
難相立義ニテ無據御人數御指向相成候條其意味篤ト相辨へ官兵ト共ニ
暴行者ヲ討滅致シ常州人民ノ害ヲ除キ報國ノ赤心ヲ顯シ政府ト一致ニ
盡力社御親藩之臣共可申候且又長藩之者共京師に押入恐多モ 御所邊
に亂入砲發致シ 朝敵之賊等即時ニ過半誅戮ニ及ヒ凡 皇國ニ生ル者
誰カ尊 王ノ道ヲ不知者ハ有之間敷然ニ長州一藩討取可申段從 京
師被 仰出候間是等之義ハ篤ト相辨心得違無之様精々御申諭相成候様
可被申上候

但本藩家來ハ勿論末家并他出罷在候者ニ至迄成丈急速本文之趣行届
候様可被致候

第十三

水戸様御家來石見守父鈴木長門守江戸出府之義ニ付風説書寫

水戸之藩鈴木石見守父同氏長門守隱居料八百石ニテ被相出家老役被申
渡此度朝比奈彌太郎一同過ル十一日水戸出立出府之處同十二日土浦に
晝時頃著ニ相成候由然ルニ右之兩人伺之上ナラテハ相通候儀不相成由
ニテ滞留直ニ早飛脚ヲ以御伺出之上無異儀申來同十四日出立罷登候由
ニ御坐候風聞ニハ江戸御屋敷ニ天狗之徒交居候義ヲ爲届之ニ罷登候由
右相濟候得ハ右彌太郎直ニ罷下左候得ハ太田丹波守ト申仁右長門守同
様被相立候哉之風聞ニ御坐候

七月

第十四

鈴木石見守浪士恐怖之義ニ付風説書寫

一水府柳派ト申藩士先般江戸表に罷越殘居候老臣鈴木石見守殿城代トシ
テ御城内に家内不殘引移罷在候由實ハ天狗派之者手強自分屋敷に居リ

付急城中に引込御門ヲ固罷在候由ニ御坐候先般江戸表に罷登候柳派ノ藩士市川三左衛門殿家内水戸城外自分屋敷ニ罷在候處去月下旬頃ニ候哉浪人共押入家内不殘下人共迄殺害ニ及候由ニ御坐候

一潮來館取締之爲ニ詰合罷成居候林忠左衛門井ニ林五郎三郎兩人犬將分ニ御坐候由之處當時忠左衛門江戸詰罷成候ニ付五郎三郎壹人罷在候由
八月三日

第十五

水戸書生組ニテ穢多ヲ召使候義ニ付風說書寫

一長岡驛近邊平須村穢多五兵衛ト申者書生之意ヲ受天狗黨に折々取合候處五兵衛手之者八百人計何モ乞食之由強壯ニテ毎度天狗黨敗走之由風聞御坐候

一去月廿八九日頃水藩之御家老岡田新太郎子息之由壹人書生組之方ニテ相捕ヒ弘道館中に引連參リ候由其外右書生殊之外手荒之所業御坐候由

風唱ニ御坐候

八月

第十六

水戸書生組所々手配之義ニ付探索書寫

水府城下西之方好文亭ト申景色甚宜敷外廻リ土手ニテ梅樹夥敷植込向山ニハ櫻紅葉松ヲ植込土手下ニハ丹頂鶴數十羽遊フトイヒトモ人々不^{ヘカ}警又千波池ヲ見晴シ其風景四季共ニ歡樂之地ナリ扱此好文亭に書生方大將箕茅澤杉浦等之面々ヲ始トシテ書生方四百人余其外ニハ竹鎗鐵砲ニテ百姓共何千人トテ限ナク此所に相詰又清水村出口ニハ書生方三百人程其外竹鎗鐵砲勢貳千人余上町谷中桂岸寺馬場にハ書生方渡邊半助貳百人程ニテ相固晝夜町々不殘嚴重ニ相廻リ外ニ町方同心切火繩ニテ相廻リ町々篝火出口迄焚町方勢四丁目番屋前に拾五才ヨリ六十才迄白布之鉢卷竹鎗長脇指得物々々引提相詰合言葉ニハ茄子トイヒ^{新字カ}イカホチ

ヤト答ヒ露霞之如ク詰懸タリ又家々之軒端ニハ銘々之定紋打タル高張
 提灯下ケ誠ニ白晝之如シ浪人共何程押來ルトモ一當テニ蹴タヲサント
 ノ勢ヒナリ女子供在々之縁家ヨ行モアリ又ハ山野ニ小屋カケ致シ候モ
 アリ其騒動ハ一方ナラス浪人共在方町方ヨリ廿人廿人^{掛カ}ツ、生捕日々引
 連レ參リ候又在方町方ヨリ浪人仲間ニ入候者之宅ハ皆々打寄柱ヲ切打
 破リ申候武家郷士百姓町人天狗ニ相成候者親類ハ義絶或ハ妻子ハ離縁
 イタシ在々町々迄木之葉天狗ハ何萬人共數知レス出申候右ニ付水戸街
 道入口消魂橋ト申所ヨ書生方貳三百人程大筒小筒ニテ相固候事

第十七

武田伊賀守等地方先納致間敷義ニ付水戸表ニテ被相觸候書付寫

- | | |
|----------|--------|
| 武田伊賀守 | 榊原新左衛門 |
| 大久保甚五右衛門 | 鳥居瀬兵衛 |
| 三木左太夫 | 岡田新太郎 |

- | | |
|---------|--------|
| 加藤八郎太夫 | 大田原傳内 |
| 白井忠左衛門 | 富田三牧助 |
| 谷鐵藏 | 飯田總藏 |
| 中山民部 | 武田彦右衛門 |
| 谷彌太郎 | 門奈三右衛門 |
| 山國兵部 | 同源一郎 |
| 高橋勇一郎 | 福地政二郎 |
| 三木孫太夫 | 三好衛門八 |
| 里見四郎左衛門 | 立原朴次郎 |
| 山中新左衛門 | 新井源八郎 |
| 矢野正二郎 | 天野藤二郎 |
| 尼子仙之助 | 黒澤忠之進 |
| 平澤平太夫 | 服部久太夫 |

伊藤田宮	岡崎唯右衛門
小池源左衛門	鮎原 <small>澤カ</small> 伊太夫
長谷川道之助	鈴木庄藏
同德太郎	國松銀太郎
櫻村半藏	林忠右衛門
野村英之助	原熊之助
小川熊之助	已成勇右衛門
山口德之助	森三左衛門
村島万二郎	森三左衛門
岡見甚内	渡邊宮内右衛門
金子勇二郎	右河半藏
栗田八郎兵衛	杉本平左衛門
淺田慎之助	平戸喜太郎

右之類地方先納之分何様申聞有之候共決テ先納不致様相達シ有之候條
其旨相心得可申候先之段早々順達可被成候

于九月

第十八

浪士隨從之者今更後悔之者歸村御差許ニ可相成夫々役所ハ可申出云
々之義ニ付水戸表ニテ被相觸候書付寫
御領中農民共大勢致出發近來ニ至リ筑波邊屯集之者共御國內ハ入來候
ニ付今般御追討之處其内全カ金時勢ニ隨ヒ無余義致出發今更後悔黨類ヲ相

離レ候者ハ得ト御糺之上歸村御指許可相成候間役人共差添速ニ評定所
井支配役所ヨ罷出御吟味相受可申候若民家寺院山林等ニ隠レ於相出ハ
必定罪科之者ニ候間見付次第ニ搦捕其段速ニ可申出候致手向候ハ、打
殺切殺候共不苦候條可得其意候

一近國村々大勢相催シ役人小前之差別ナク家作等相潰候類追々致增長候
趣相聞候右ハ定テ罪狀有之様可申候得共彌罪狀有之者共村役所ニ仕置
方有之義然ルヲ下知ヲモ不相待私ニ相潰シ候ハ、不憚役所致シ方甚以
如何之事ニ候畢竟是迄御領中取亂シ候モ不心得之者共自己之振舞ノミ
イタシ候事ヨリ起リ此度御大變ニモ至リ候段一同承知仕居ナカラ左様
不法之致シ方は迄之者同前之事ニ候殊ニ取潰シ候者之内ニハ格別之罪
科有之ニモ不限趣相聞別テ不穩所業ニ候若罪科有之者ニ付吟味之上幾
重ニモ取締方有之候間役人ハ勿論小前之者タリ共無貪著^{頓カ}可訴出候
右之通相達シ於相改ハ頭取致シ候者召捕嚴重申付候條心得違無之様可

致候

右之趣村中寺社門前ニ至迄不洩様可申觸候

子九月

- 兒玉園右衛門
- 石川新吉
- 石川幹二郎
- 北河原常右衛門

第十九

水戸様御家老女中江戸出府之義ニ付探索書寫

水藩之老臣其外女中之類出府之由ニテ土浦ヨ罷越候處土屋侯ヨリ差留
ニ相成水戸ヨ問合之上ニテ今十四日朝出立出府ニ罷成候

- 朝比奈彌太郎
- 石見守父 鈴木長門守
- 吉野英臣

右之通承申候間申上候昨十四日水府邊に聞拔之者差出申候間又合戦モ有之候ハ、追々可申上候小生府中迄罷越昨十四日歸リ申候ニ付右荒々如此御坐候

十月十五日

第二十

水戸擾亂後之風説書寫

一 水戸様御家來又々擾亂仕候段密々相唱尤右堂は一門人に入塾仕居候水藩某ト申者國元ヨリ報告有之一昨日頃急ニ歸郷仕候由一向相分不申段々承拔候處昨年合戦之節有切之者朝比奈佐藤鈴木市川等ヲ始書生組迄切之大小ニヨリ御加増相成候處渡邊波門書生組ニテ御加増之命相下候術師範之者處昨年合戦之一條矢張上之御爲ニ御坐候間少々心力ハ相盡候得共假令ハ兄弟合戦モ同様然ニ 公邊ハ勿論諸藩ヲ大ニ騒シ爲夫非命之死ヲ遂

波門傳聞ノ誤
波ハ派ナルヘ
シ波邊平助ノ
黨中ノ力カ其
太耶ナル者松
リ此説兩渡邊
チ混合セリ

候者ハ幾許可有之哉右ハ全水戸一藩之耻辱未タ諸藩に報恩モ不仕候内御加恩頂戴仕候テハ本意ニ無之段申立三四ケ度御下知ヲ相拒候由之處重役之者共嫌疑ヲ生シ右様君命ヲ違背仕候上ハ異心有之故ニ可有之ト申右同人揚屋入ニ相成候處同志之者大勢大ニ騒キ立種々周旋仕候得共中々相解不申依テ同志之者共十人余過ル十日頃ニモ御坐候哉ニ小石川御邸に馳上リ直訴致シ候由頓テ御免ニ可相成哉ニ相聞得申候一體水戸ハ文物國ニ御坐候處名分ヲ正姦ヲ頗ル穿鑿仕過候共可申上
天朝ハ大ニ尊崇 幕府ハ少々疎薄之姿有之且國中善人惡人正黨姦黨ト明白ニ吟味仕姦黨惡人之名ヲ得候者ハ嚴シク擯斥致シ候風ニ御坐候處正姦之名ニ分レ候處ハ則禍難之起ル所ニ可有之烈公御在世之時ハ正黨之武田伊賀守之徒大ニ任用朝比奈之徒ハ黜ラレ候處武田之徒斃レ候以來最初姦黨ト相唱候朝比奈彌太郎鈴木石見守佐藤圖書市川三左門之徒大ニ志ヲ得威權ヲ專ラニ致シ候由ニ相聞得候得トモ一藩心服仕候譯

ニハ有之間敷且松平大炊頭殿御次ニ相成候モ恐ラクハ冤罪右一藩之ウ
 ラミハ朝比奈市川之輩ハ相歸シ可申又武田田丸山國其他巨魁之者之妻
 子ハ三才之童子モ斬罪ニ處シ大ニ慘毒ヲ極メ候處恐クハ往古平氏勢盛
 ナル時源家之一類ヲ戮シ豐公之關白秀次一家橫殺仕候以來右様甚敷義
 ハ有之間敷是皆朝比奈之徒所謂根ヲ斷チ葉ヲ枯サズ候ヘハ自然枕ヲ高
 ク致シベキ様無之故ニ可有之然ハ遺憾ヲ含ミ不平之輩可有之候ヘトモ
 各其力之不及ヲ以包默罷在候譯ニ有可之且大場一心齋原市カ一之進等一橋
 公ハ附屬之輩ハ武田等之黨ニ有之朝比奈之徒トハ互ニ不相容讐敵ニ可
 有之然ハ遂ニ大場之輩ハ如何相成可申哉彼是妄察仕候ニ後年事ニ寄水
 戸ハ再ヒ動亂可仕歎息之至ニ御坐候

一當今水戸ニテ奸徒トハ申モノ、水戸第一之人物ハ市川三左衛門ニ御坐
 候由昨年來之處置ハ八分通りハ同人之手ニ出候由近來同人居宅ハ刺客
 三ヶ度相入候得トモ終志ヲ不得由ニ御坐候

十月

一無慮雜集

第一

水戸道中筋探索書寫

拙者共去月廿八日御國元出立一同罷登候處浪人共下野大平山等ハ籠居
 候一件ニ付道中筋ニ於テモ爲差唱ヒモウケ給ハリ不申候處過ル四日水
 戸之御領ニテ風唱ウケ給ハリ候得ハ今以水府之御家中二ツニ分レ天狗
 柳連ナト、稱シ御家中一致不仕候處田丸稻之右衛門天狗組之魁首ト相
 成黨ヲ結追テハ大平山ハ籠居候一件ニ付テハ當時水府ニモ又々揉合相
 生各慮異同ニテ御家中穩ニ無之勤役之者ニモ此度隱居又ハ蟄居入牢等
 ニ被相行居候者共有之由稻之右衛門ト申者ハ多年勤役之者ニテ町奉行
 相勤居候者之由專ラ攘夷ヲ名トシ黨ヲ結天狗組之頭ト成又ハ所々之浮

浪人或ハ百姓ニテモ強氣之者ヲ語ラヒ衣服大小等ヲ與ヒ手下トナシ軍
事金トカ稱シ府中ニオキテモ千兩餘借受候由且同人實兄山國喜八郎ト
申者モ水戸大目付ニテ郡奉行ニテ次本ノ下相勤居候處是又一同大平山ハ籠居候
由然ニ同五日拙者共府中罷通候砌天狗組之由ニテ五人十人ツ、市中徘徊
致居候異風之者ニ數度行逢候處目印ニモ可有之哉一統紫色之羽織ヲ
著シ中ニハ總髮杯之者モアリ市中ニテ買物仕候様子ニ相見得候處是ハ
過ル三日之頃浪人百人程府中ハ罷越翌四日朝ニハ又々貳百人程到著頭
分之者ト相見得馬上ニテ罷越候者モ三四人有之東陽寺正興寺天王別當
院三ヶ所ハ旅宿ヲ構其外市中ニモ宿シ居候由右大平山并常州筑波之邊
ニ集居候者共引移候由ニ相聞得候處食料等之義ヲ始人夫等召仕候節共
相對ヲ以夫々入料差出手當モ相應ニ仕候事ニテ強勢之舉動杯ハ無之由
扱又此度府中ハ引移候次第風説ニハ南部浪人山田一郎ト申者黨類ハ加
リ居一體利發之者ニ付筑波山ニ籠居候浪人之頭分ト相成居候處逐々變

心之氣顯レ中間之者共ニ可被及殺害様子ニ付雜用之タメ貯置候金子ヲ
持脱シ劔法之弟子之由ニテ外ニ四人一郎供ニ密々出立 公義御役所ハ
自訴ニ被及且水府ニテモ稻之右衛門等多勢浪人ト成黨ヲ結命令ヲモ不
待自ラ攘夷之儀ヲ唱所々金子等押借致候事件不容易之事柄ニ付テハ成
丈 公邊之御世話ヲ不待討取可取鎮ト御家中之内銘々申合先以相伺差
圖之上可指向ト相決人數上下四百人程去月下旬小石川ハ罷登候途中片
倉ニオキテ天狗組ニ屬シ居候手下之者兩人ヲ召捕土浦ハ預リ牢ハ入置
罷登候義モ有之一體ニテ最初思立候程ニハ行届不申勿論一方之山所ニ
籠居候テハ猶更食料等ニモ逐々事ヲ欠候譯ニ可有之旁捕手トシテ被向
候時ニハ却テ雜還之地ニテ一戰ニ可及ト申候一ツニハ取手ニ對シ逆寄
之心得ニテ引移候内存ニ可有之由遂ニ貯モ盡果候テハ鳥合之者ナトハ
何様之惡事ヲ行候哉ハ相知不申候得共當時之模様ニテハ猥リニ強勢不
法之舉動ニハ及申間敷山相唱且新宿邊ヨリ江戸近クニテ相唱候ニハ浪

士大勢ニテ下總結城ヲ劫シ常州下館ハ亂入シ居館乗取候ニ付石川若狹
 守殿七日未明千住口ヨリ御下相成候抔取々之風説モ御坐候得共最寄之
 海道筋ニテハ右様之義更ニ唱モ無御坐勿論下館ハ亂入等之義ハ虚説之
 由ニ相聞得申候事右之通拙者儀通行一篇之途中ニテ承リ候迄ニテ深ク
 探索不仕候得ハ事實ハ齟齬仕居候義モ可有御坐候得共一通承及候趣風
 説之儘ニテ申上候以上

六月九日

第二

奥州道中筋探索書寫

一御國元出立ヨリ白川城下入口迄別條無御坐候得共伊達邊ヨリ道中筋馬
 士駕籠昇其外行路之人浪人之風唱之外無他事人心洵々タル事ニ御坐候
 一白川入口ニ新番所補理輕卒十人計鎗鐵砲ニテ相固メ書生如キ者五六人
 出張致居候竹内千之助罷通候得ハ名元承リ候ニ付夫々相答ヒ無異義罷

通リ申候拙者儀ハ駕籠ニテ罷通リ候處何共不申聞候夫ヨリ五六丁參リ
 候得ハ又番所有之二三十人張番仕居申候是ハ何共不申聞候夫ヨリ白川
 出口ニモ張番所有之此所ニテモ拙^{者脱カ}ハ井千之助共名元被承夫々相答罷通
 申候

一夫ヨリ宇都宮迄之間何事モ無御坐候宇都宮町入口ニ大筒貳挺備置張番
 諸士凡四五十人モ固居火繩ハ火ヲ付具足ハ脇ハ脱置申候此所ニテハ通
 行之者何レモ名前ハ勿論先觸等迄相改申候夫ヨリ五七町參橋内ニモ張
 番有之是ハ猶大勢同様相固居相改申候夫ヨリ出口ニハ兩方ハ大陣屋ヲ
 懸置人數貳百人余モ相備尤具足陣羽織拔槍等ニテ扣居同様相改申候
 一夫ヨリ小山ニハ宇都宮勢六百人程旅宿々々ニ幕張リ之上具足等前同様
 心懸相備居町外レニテ相改申候
 一古河驛御固ハ夫々御坐候得共往來相改候義無御坐候
 一房川如兼テ之相變候義無御坐候

一杉戸ヨリ千住驛迄驛々何方ニモ水戸様御人數并 公邊御役々其他歩兵等充滿仕居申候水戸様御人數ハ八百人程歩兵ハ五百人程 公義御役々ハ千住迄御出張之分幾人ニ可有之哉到所ニ宿札五十人之七十人之ト申様ニ相見得尤今夕千住迄被相下御人數モ數百人_之由ニテ驛々之混雜可申様無御坐候人家モ暮方ヨリハ相聞届申候殊ニ水戸様御人數旅宿之驛ハ夜中見廻リ等彌嚴重ニ相見得申候

一右様嚴重故歎浪士之横行ハ無御坐候得共明日千人參ルノ明後日五百人參ルノト申先觸等有之由ニテ大騒動可申様無之事ニ御坐候

一字都宮ハ浪士十人計宿駕籠ニテ何カ爲談判之參候ヲ見受候其内一人ハ手負ト相見得申候右之者共宇都宮入口陳場ハ參リ候ヲ差留置四方鐵砲ニテ相圍居締リ仕居候趣迄承リ其後之義ハ相知レ不申候

一驛々日々早駕籠早馬之通行頻ト繁ク可申様無御坐候

右之通見聞之儘計申上候結城下妻真岡等戰爭之模様ハ追テ申上候様可

仕候何レ之道ニモ落著十日之外ニハ出申間敷哉ト專ラ申唱候義ニ御座候以上

七月十七日

第三

同斷

一十三日福島罷通り候節板倉侯御人數七十人計同日出立宇都宮ハ被差出由ニテ右人數ハ都テ百姓ヲ足輕ニ仕立候者ト相見得大小帶シ候者モ有之又ハ長キ脇差壹本計ヲ帶候者モ入交有之候右之者共咄承リ候得ハ前々日ハ君公御發駕江戸表ハ御登リ被成前日ハ御家中士分之者貳百五十人程出立是ハ宇都宮迄被差出候由申聞候

一十七日宇都宮ニ止宿仕候處同所旅駕籠屋_{衍字カ}之部ハ大概二本松福島之兩藩人數宿所ニ相成居二本松人數ハ大凡六百人余福島人數ハ三百人余ト申事ニ承申候兩藩何處古河ハ出張相成候 公邊御役人之御指圖相伺何方

ナリ人數繰出候積ニテ只今ニ無事ニテ滞留之事ニ御坐候

一右同所入口出口共ニ出張所有之往來諸藩人駄賃帳相改獨歩之者印判相改候事ニ御坐候此所ヨリ雀宮石橋小金井芋穀新田邊迄之間不斷槍留著用之鐵砲足輕十人十五人ツ、大繩火カハ火ヲ點シ往復致シ居申候右ハ宇都宮ヨリ御取締之タメ被指出候者ニ御坐候

一十八日小山宿罷通候節御書院番頭酒井越中守殿大將トシテ組下貳千人計右ハ間々田驛止宿之處今日下總結城迄繰出ニ相成處ト相見得何レモ小具足陣羽織著用小銃隊并劔槍之組ナリ大砲隊ハ御小性組ニテポト忽砲三門車臺ニテ爲引申候

一小山宿ハ古河ヨリ繰出之御人數止宿是ハ大御番組ニテ「ゲウユール」ヲ爲持劔槍之士入交騎馬之分ハ「ガラヘーン」并「ピストール」ヲ持參是又千四五百人計ト見受申候

一同日古河山宿止カ仕候處田沼玄蕃頭殿旅宿相成居旅行籠屋壹軒モ明所無之

漸々今晚限リ明ニ相成居候御用宿ハ無心仕止宿仕候仕合ニ御坐候同所ハ放火之者數多入込仙臺家中抔ト僞リ又ハ人足體ニ相成忍居候者拾人計搦捕候由浪徒ヨリ種々問者ヲ仕立姿ヲ變シ或ハ御家御家中ト僞リ早駕籠ニテ參リ候者三人有之由右故暮方ヨリ無提灯ニテ旅行難相成様子ニ御坐候此近邊此頃ニ相成候テハ浪人ト戰爭モ無之由六日頃トカ申候壬生之御人數大敗北死人モ大分有之由其後戰爭ハ無之由但田沼侯出張後古河宿ニ廿日以上滞留被成徒ニ日數ヲ送り被居候ヲ組下之者始不平之輩數多有之至テ不評判之由通路之者申ニハ討手之大將ヲ被嫌疑ハ、別人被指遣候條早々歸府可被成由江戸表ヨリ申來無據十九日古河出立小山宿迄繰出候事ニ相極候由併同日拙ハ同所出立之折迄ハ未繰出ニ相成不申候

一筑波山ニ籠居候浪徒ハ此節ニ至リ水戸表働出シ同藩兼テ浪人共ヨリ奸黨ト名付置候水戸様御家中ト同士打盛ナル由互ニ死傷有之由湖湖カ來館邊

の大勢集居折々水戸御城中ニテ戰爭有之由ニ御坐候
 一福島侯二本松侯御備大砲ハ御國元ヨリハ御持參無之却テ江戸表ヨリ被
 相下候者ト相見得大人數ニテ爲引下リ候ニ行逢申候外相變候義無御坐
 候以上

八月

第四

御目付某 公義御目付衆御旅館ハ罷出御直々相伺候廉々相達候書簡
 寫

前文略然ハ當節形勢段々江戸詰御奉行衆ハ其時々相達置候間定テ一々
 奉達 御聽候半其後去月廿七日 公邊追討御人數之内御目付戸田五介
 殿ヨリ御達之義有之一人罷出候様當御陣屋ハ差向東道中牛久宿御旅宿
 ヨリ申來御代官罷出候處今般追討ニ付浮浪之徒散亂御領ハ罷越候モ難
 計左様之節ハ無二念討殺萬一手ニ餘リ候折ハ出陣先ハ御申立可被成由

御達之由御代官ヨリ傳申聞一條半途之廉モ有之翌廿八日私義牛久宿ハ
 出張致候處同所ハ今朝一字御出立土浦ハ線込相成候由ニ付直ニ土浦ハ
 罷越同所本陣五介殿御旅宿ハ差向御面會申込直々相伺候趣左之通
 一御同人ハ歩兵組壹隊外ニ大銃隊モ有之且又松平周防守殿追討先陣被仰
 付精兵四百人程五介殿手ハ被相附候由尤防州公ニハ出陣ニ無之家老岡
 田求馬總督ニテ出張致シ候處周防守殿ニハ格別憤勵被成候ニ付上様ニ
 モ甚御大慶被成置候由御咄ニ御坐候事
 一田沼玄蕃頭殿ニハ總裁御免筑波北麓笠間通是モ歩兵大隊被相加候テ押
 寄候由ニ御坐候事
 一筑波山ハ押登候鳥井殿御人數モ已ニ山中ニハ奸黨居合不申候ニ付是又
 水戸ハ差向候由之事
 一奥州筋ハ散亂之程難計二本松侯宇都宮侯ハモ夫々不洩様追討被仰付候
 由之事

一利根川筋木嵐邊堀田相模守様松平右京亮殿に嚴重御固メ御達ニ相成候由之事

一水府書生天狗壹致ニ相成居候様ニテ閣老始一統心配被成居候處追々間諜ヲ入レ委細探索被成候處差常御家老市川三左衛門誠忠之者ニテ水府社稷之臣ニ付歩兵大隊一隊 公邊ヨリ被附候由是又御直話ニ御坐候事一府中邊小川館其外屯集之場所次第無二念討平ケ候ハ勿論之處水府城中は萬一潜伏不致居モノニハ無之候處御三家城中は差向砲發戰爭ニ相及候義如何ニ可有之哉暫ク遠慮之方可然哉ト閣老方ヲ始論決無之由之處兎角思召伺ト申事ニ相成舉テ被相伺候由之處元來奸賊ニ付城中ハ差置何方迄モ押寄慶戰候様ニト之英斷ニテ御一決ニ相成候由ニ御坐候事一公方様御進發ハ關東浮浪幾重ニモ討盡シ候後ニ被遊度思召ニ候間此上何分憤激此機會ヲ不取失様追討可致旨被仰示候由ニ御坐候事一右之通無御伏臆御直話相伺候尤以前御面會仕候御仁ニ有之故非常紛擾

之央ニ相見得候共煩重御指繰前條之通御懇話ニ御坐候如此四方無手弛手當責入候策略決テ敗ハ不取由御同人ハ頗ル憤勵相振居候様子ニ相見得申候事

九月十三日

第五

浪士益盛ニ相成候義ニ付某ヨリ指出候見込書寫

一水府浪人彌盛ニ相成候様子ニ相聞得候處 公邊出張之御役人并諸家ヨリ注進ニハ每戰勝軍之様ニ計申來候ニ付賊勢日々萎蕭追テ鎮靜之様ニ江戸一般相唱居候處中々左様之譯ハ無之元來必死覺悟相極候者共只今窮^欠ニ相成武器兵糧等モ澤山ニ調居寄手ハ只曠日持久之計ノミニテ更ニ憤發決戰之様子モ無之然ニ此度御留守居被仰蒙候上ニハ右等之様子委敷御探索不被遊候ナハ意外之義差起リ御當惑之事モ相出可申右様探索之義甚難事ニ有之諸家探索之者色々風體ヲ變シ罷起^{越カ}シ往々奇禍ニ遇

候者モ相聞得何レモ十分之探索出來兼候様子ニ候間右探索手口心付之處申上候

一水戸表の御人數被差出候諸侯御大勢ニ候處 此度御出府被遊候上ニハ御親類ニ耳不拘壹統の御陣見舞トシテ御使者被遣候ハ、戰場之様子諸家之戰爭之様子浪人之動靜相分可申第一ニハ貞芳院様ハ 御前様御嫡母ニ被爲有只今圍城之中ニ被爲入候得ハ是非一介之御使者モ不被遣候テハ相濟申間敷左候得ハ水戸城之様子モ大略相分可申ト奉存候

一御進發御先手十日方ヨリ出立被仰付候様子引續 將軍家御發駕ニ被爲成候哉否之義ハ分兼候得共當分ハ諸向壹統長州征伐之御手數ト相見得候處眼前御膝元追々ケ程之事件出來居賊勢日増盛強ニ罷成候ヲ十分之御鎮靜無之内遠方は出軍ト申ハ難心得義元來浪人ト長州ハ差別無之一腹同心之徒ニテ則水戸浪人征伐ハ長州征伐ニテ御坐候處近ヲ捨遠ヲ責ルハ轉倒錯亂之義ニハ有之間敷哉彌水賊御鎮靜前ニ御進發相成候ハ、

御指留目下之長州ヲ御征伐被爲有候様御策モ可有御坐哉ト奉存候

一御留守居被蒙 仰候ニ付テハ早速 公邊御内意伺上度義ハ水戸家御處置之義ニ御坐候水戸様御家來十二八九浪人ニ罷成御先代ヨリ相傳之武器不殘奪去金銀兵糧無殘持運ヒ大進歷々之徒ハ一人モ止リ候者無之皆官軍ニ向ヒ戰爭最中ニ相成殘ル御家來ハ書生組ト申テ百四五十人計ニ罷成百姓モ大半浪人ト徒黨致シ徒黨不致百姓ト戰爭虛日ナク死傷無數村々在々煙絶テ無之處往々有之由古今未曾有之奇事ニテ王代ハ勿論封建以來諸侯之國闔藩浪人ト成主君ノミ殘候例和漢共無之候處右浪人御鎮靜後ハ水戸ヲ如何様之御處置ニ被成候哉是ニテモ御家政御不取締之罪モ無之其儘ニ本領安堵被成進候事ニテハ天幸トモ可申事ニ候得共國家之典刑ハ相立間敷若又一且國被召上御親藩之事ニ候得ハ御三卿並十萬石モ賜候事ニモ可相成哉右御處置不分ニ候テハ策之施シ所無之事ニ御坐候

一水戸浪人彌盛ニ相成候ハ、東方之諸侯總掛ニ可被仰付其節ハ官軍惣督之御任ハ御家ニ可被仰付甚難事ニ御坐候處大童氏之策略頗妙策ト奉存候何レ水戸ニテ本領安堵ト申義ニハ相成間敷就テハ征伐總督ハ秋田侯ニ被仰付水戸ハ則秋田舊領之地ニテ關ヶ原御陣石田ニ黨シ候罪ヲ以封境被相覺

徳川家ニ對シ遺憾アル家筋ハ東方ニハ秋田耳ニ候處此度天運循環舊領ニ相復シ候事ナレハ積年之憾一時ニ氷解上下盡力一押ニ追討可仕鎮靜之上ニハ常陸ノ國替被仰付候様御周旋被遊候ハ、公邊御爲ニモ秋田家之爲ニモ兩全之義ト奉存候若左様ニモ無之御家ニテ大人數御用被成候様ニテハ甚難事ニ候間此義御熟考有度事ニ御坐候

第六

上州厩橋木崎宿張札寫

抑當今之勢實ニ國家機會四方有志之輩一死報國ヲ唱人海騷擾スル事已

ニ北越勢ハ信陽ニ屯シ甲州之兵ニ會シ關西ニハ長州浪士七八百淺東海道江尻迄モ押出シ往返諸侯ニ謁シ天下之大義ヲ唱ヒ議論抔仕候事人々知ル所ナリ是全ク筑山ヨリ通使有之候ニモ無之候得共自然同様之時節天之然シム所ナリ然ニ今般一時偷安之鼠輩國賊抔ト申幕命ニ應シ出陣之諸將何故ニ堂々タル天朝之高論ニ從ハサルヤ然ニ天下之百姓犬羊之區々落ン事近ニアリ誰カ不知之ヤ今亂ル、事半ニ過タリ近國未發之盟士貳千八百ニ越タリ勇氣ヲ醸シ大義ヲ踏ント欲スル久シ故ニ筑山出陣之兵ニ應スル鼠輩勢ニ乘シテ四方雲合之功名ヲ全セントスルナリ不日ニ尊王攘夷之大義ヲ令知者也

大事將發之時認勤王之士

隊長

小島多門

第七

當時流行謠

「我敵ト思ヒハコワシ構筒鎗屋小筒ヲ肩ニカケ裏切行ノハ冬ノ夜ノ濱風
塞クヒバリ塚忍フ裏切小松原武士ハカフシタモノカヒナ實ニヤルセカ
ナイカイナ」

「夕暮ニ敵を見張の箒火の月の風情の峯の山沖へ軍船見へるそやあれ鐘
かなる責太鼓湊ニ天狗りおるをいふ」

「丹羽の飛鳥居の進む世の中ニ何とて戸田のけれあるふん」

第八

水戸余八九様京師ヨリ常野浪徒御追討御出陣之節桑名藩某詠候詩一
首寫

自是同根弟與兄鶴鶴原上却交兵可憐公子關何事匹馬肅々踏雪行

波山記事卷十二終

役員

副總裁 侯爵 蜂須賀 茂韶

會長 赤司 鷹一 郎

幹事長 中原 邦平

幹事 岩崎 英重

幹事 早川 純三 郎

顧問

侯爵 松方正義 伯爵 土方久元 公爵 鷹司 熙通

公爵 九條道實 公爵 山縣有朋 公爵 德川 家達

侯爵 德川義親 子爵 金子堅太郎

評議員

子爵 三島彌太郎 子爵 小笠原長生 男爵 尾崎 三良

男爵	澁澤榮一	文學博士	萩野由之	原六郎
	原保太郎		德富猪一郎	早川千吉郎
	豐川良平		加藤正義	男爵 大倉喜八郎
	大谷嘉兵衛		小牧昌業	中原邦平
	小松原英太郎	文學博士	三上參次	赤司鷹一郎
	黑澤次久		池邊義象	辻村楠造
	武岡豐太			

大正七年四月現在(次第不順)

侯爵	松方正義	侯爵	蜂須賀正韶	伯爵	土方久元
公爵	山縣有朋	侯爵	黑田長成	子爵	金子堅太郎
男爵	尾崎三良	公爵	島津忠重	公爵	嶋津景家
公爵	毛利元昭	子爵	吉川元光	侯爵	山内豐景
侯爵	前田利為	侯爵	細川護立	侯爵	池田仲博
侯爵	池田禎政		有馬頼寧	公爵	九條道實
侯爵	木戶家	男爵	三井八郎右衛門	男爵	岩崎久彌
	小松原英太郎		原六郎	男爵	澁澤榮一
	豐川良平		早川千吉郎		高田慎藏
	川崎八右衛門	男爵	南部斐男		久原房之助
東伏見宮家		東宮御所	李王職	閑院宮家	

公爵 德川家達 子爵 大久保家原保太郎

侯爵 伊達家 小牧昌業 文學博士 萩野由之

文學博士 三上參次 赤司鷹一郎 中原邦平

國學院大學 伊東祐毅 村井吉兵衛

加藤正義 桐島像一 東京帝國大學圖書館

德富猪一郎 富田幸次郎 神宮奉齋會

男爵 岩崎小彌太 鷹司照通 藤田政輔

男爵 藤田平太郎 井伊直忠 川上直之助

帝國圖書館 內池三十郎 法學博士 上杉愼吉

田邊密藏 第一高等學校 中山正善

男爵 嶋津久家 東京高等商業學校 東北帝國大學圖書館

第二高等學校 井上勝之助 木村清四郎

成田圖書館 渡邊千秋 伯爵 松浦厚

伯爵 寺內正毅 宮崎圖書館 長岡市立互尊文庫

伯爵 德川達道 住友吉左衛門 京都帝國大學文科大學

廣島高等師範學校 廣島 山內一次 男爵 牧野仲顯

公爵 三條實憲 前川一郎 小柳津要人

法學博士 林民雄 華族會館 神田鑼藏

學習院 須田利信 貴族院 南葵文庫

男爵 大倉喜八郎 佐藤範雄 朝吹常吉

侯爵 西鄉從德 池田謙三 子爵 三島彌太郎

辰澤延次郎 菊池晉二 周布公平

第六高等學校 伯爵 酒井忠道 野崎廣太

赤星鐵馬 樞密院 米澤元健 東北帝國大學農科大學

陸軍省 大谷嘉兵衛 茂木惣兵衛 田中留吉

山川勇木 原富太郎 井上準之助

桃井可雄 金子元三郎 小野光景

大阪天滿宮社務所 武岡豐太 東京商業會議所

大阪府立圖書館

侯爵

德川義親

福原八郎

安田善三郎

田村市郎

森田金藏

小笠原長生

高知縣立圖書館

早川純三郎

岩崎英重

教育總監部

岡上為右衛門

杉山四五郎

山口圖書館

中島久萬吉

宮本仲

安田善雄

三浦新七

藤山雷太

奈良女子高等師範學校

第三高等學校

淡中孝八郎

神宮文庫

三井家編纂室

醫學博士 佐々木政吉

井原豐作

博文館編輯部

京都帝國大學圖書館

京都府立圖書館

小川多一郎

堀田正恒

高頭仁兵衛

維新史料編纂會

神戶高等商業學校

渡邊勝三郎

武藤山治

早稻田大學圖書館

箕田長三郎

大森鍾一

神戶市立圖書館

穗積陳重

久世廣英

新庄金生

西山亮三

都筑馨六

清海復三郎

男爵

山口恒太郎

河野巖男

森本信富

南義二郎

田中光顯

今村繁三

小倉久兵衛

成瀬正恭

渡邊國武

渡邊治右衛門

渡邊千代三郎

堀啓次郎

芝川又右衛門

佐々木勇之助

金光鑑太郎

北海道殖銀行

橫山章

松平定晴

辻忠郎兵衛

日高榮三郎

植木平之允

西脇濟三郎

竹村與右衛門

諸陵寮

本間光彌

具島太助

上野理一

山下龜三郎

南波禮吉

古河虎之助

第四高等學校

文部省

法學博士 石渡敏一

中川小十郎

上野勝啓

男爵 島村速雄

澁澤義一

松平慶民

伯爵 伊達家

男爵 目賀田種太郎

安川敬一郎

各務幸一郎

男爵 本山彦一

大川平三郎

山口吉郎兵衛

子爵 中村房次郎 子爵 本野一郎 小池國三
 荒井泰治 松方五郎 杉原榮三郎
 井上匡四郎 菊池循一

右以印刷代謄寫各藏一本

大正七年四月二十日印刷
 大正七年四月二十五日發行

波山記事全

(非賣品)

編輯兼發行者 早川純三郎
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
 日本史籍協會代表者

印刷者 楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社印刷所
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 日本史籍協會
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

不許
 複製

IF 2Q32

終